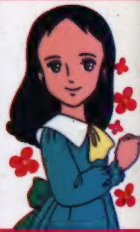
世界名作ものがたり 40

プリンセス
小公女セーラ

原作/バーネット

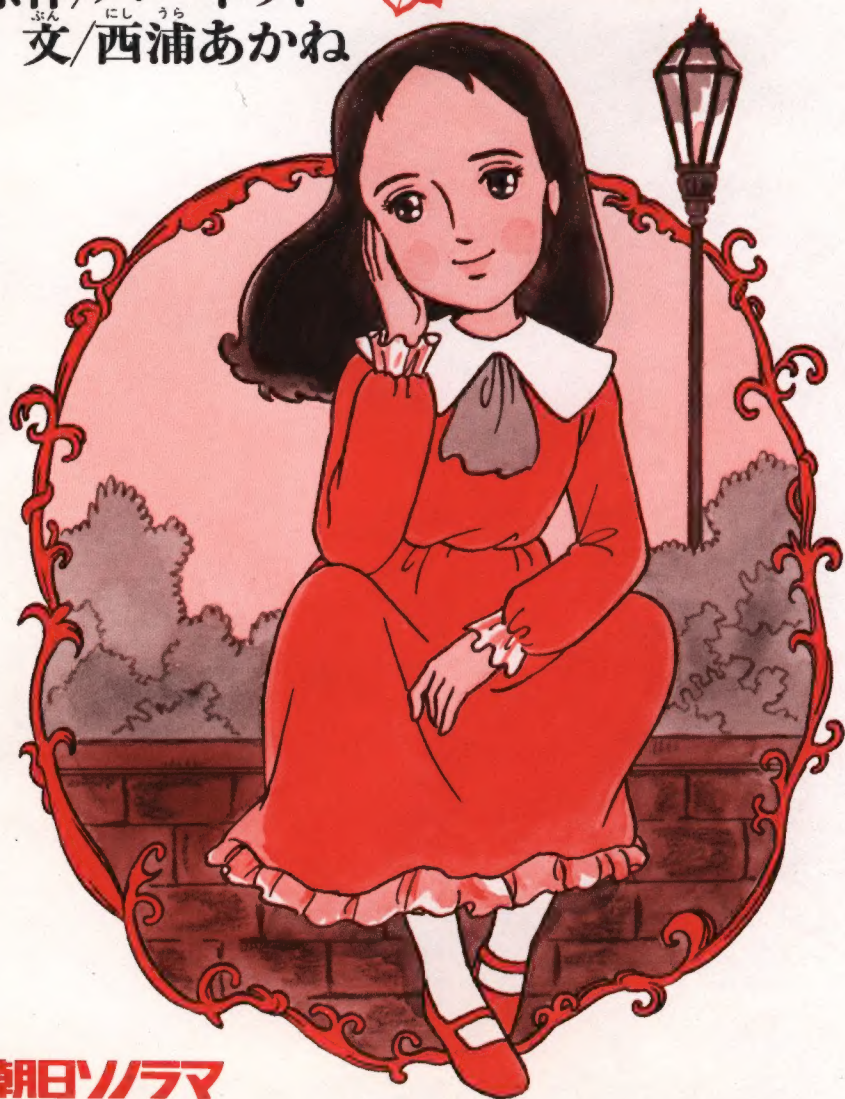
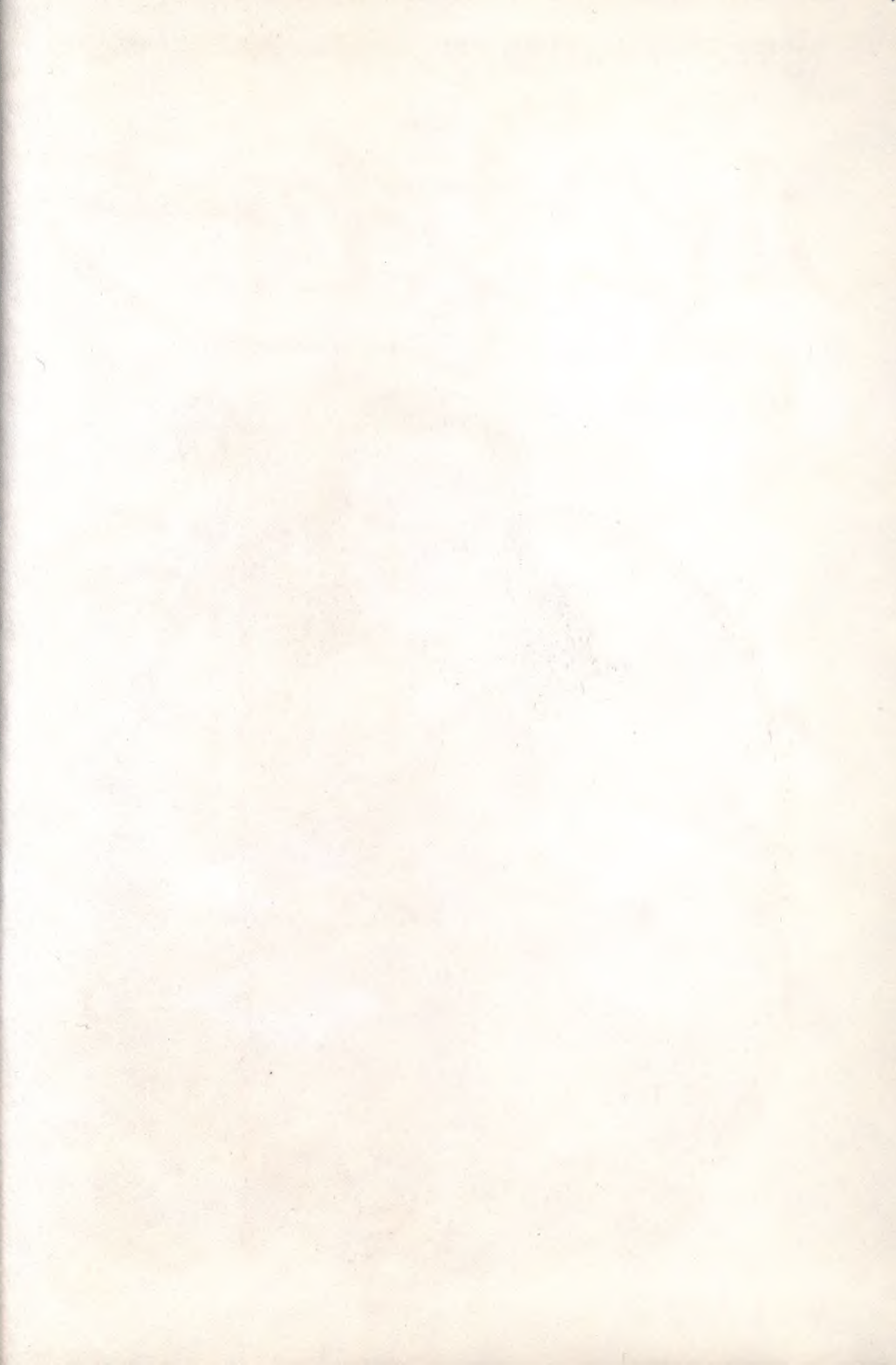
文/西浦あかね

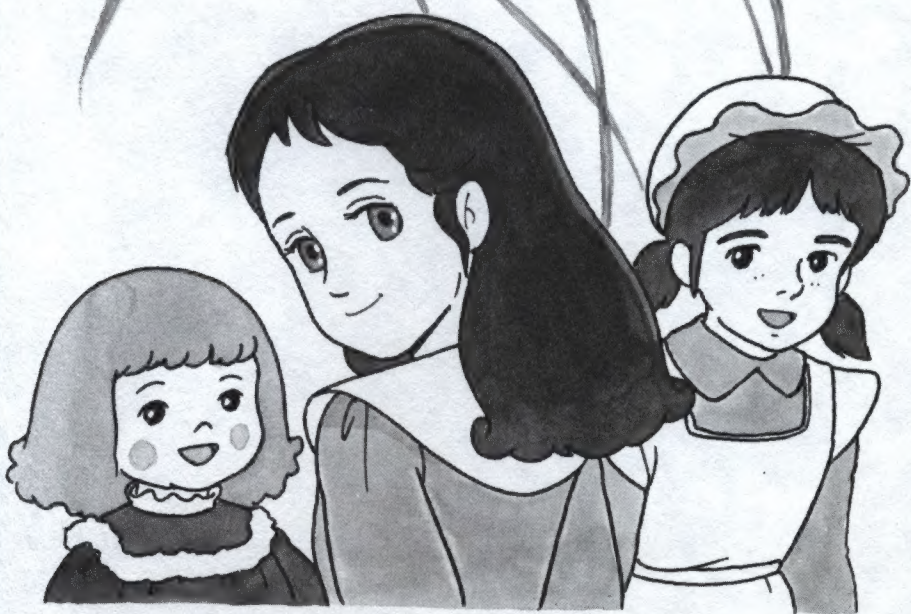
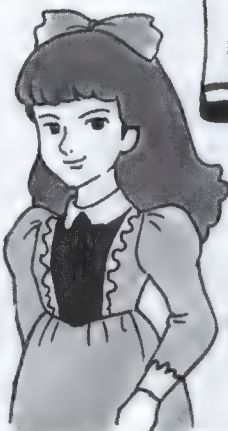
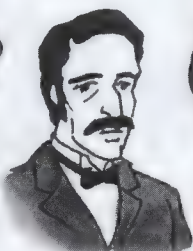
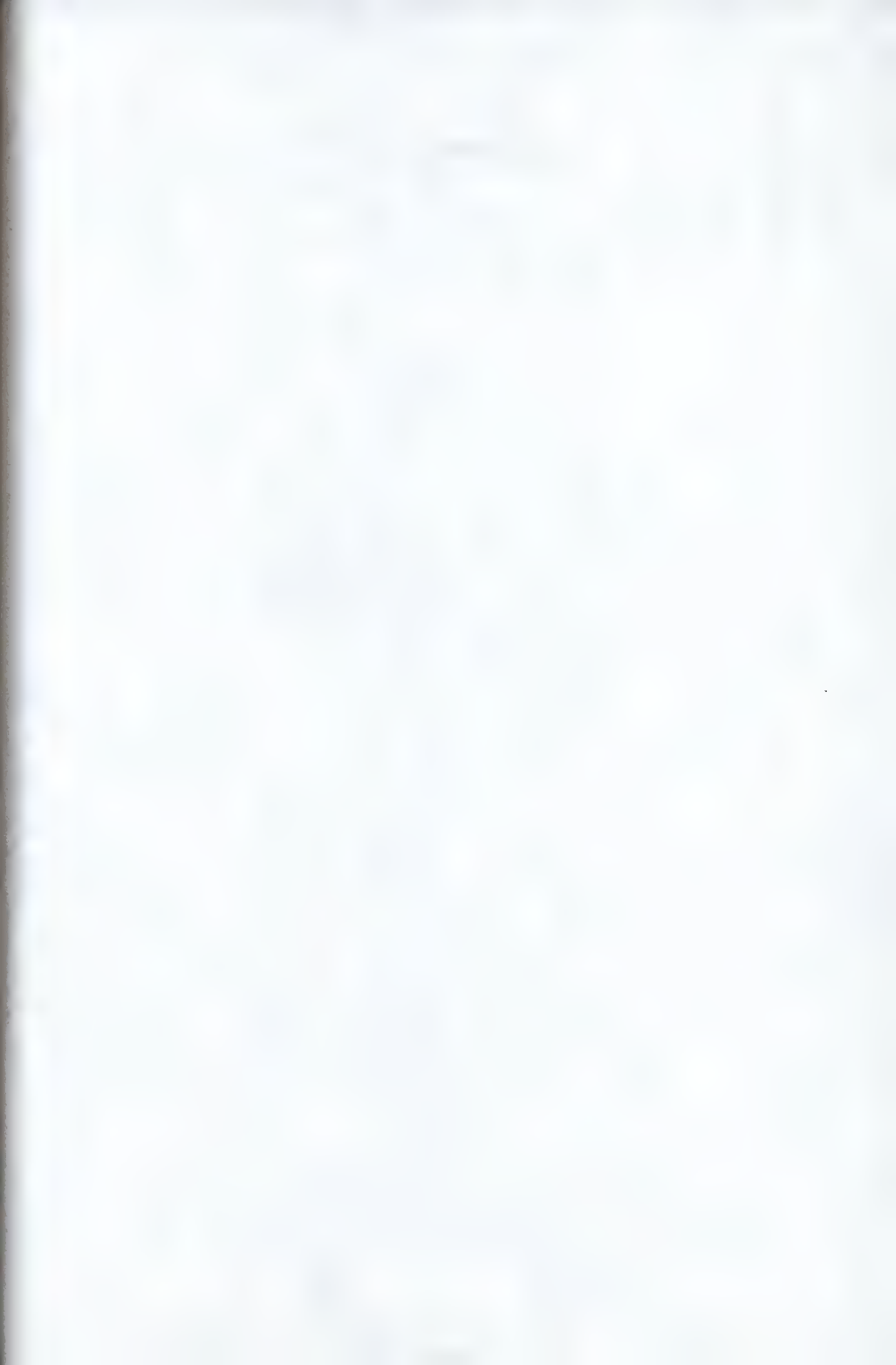
[40] 原作/バーネット

文/西浦あかね

朝日ソノラマ

世界名作ものがたり

原作／バーネット
文／西浦あかね

朝日ソノラマ

くらいやねうらべやで、三人だけの
楽しいパーティーがはじまりました。
(本文119ページ)

小公女(しょうこうじょ)セーラ ❖ もくじ

このものがたりに
出てくる人びと
▲友だち アーミー
▲とってもやさしい セーラのおとうさん
▲ベッキー
▲かわいい ロッティー
▲しゅじんこう セーラ
▲ラム・ダス
▲いじわるな ラビニア
▲おとうさんの友だち キャリスフォードさん
▲よくばりな ミンチン先生

プリンセス
小公女セーラ

1 小さなおくさま

ロンドンの町はふかいきりにすっぽりとつつまれていました。

右を見ても左を見ても、見えるのは白いきりだけです。まるで町ぜんたいがミルクのコップのなかにしずんでしまったようなかんじです。昼間だというのに通りのりょうがわの店はガスとうをつけています。そのガスとうのかがやきは、いまにもふかいきりにのみこまれそうに、ぼんやりしています。

「いよいよきたのね。パパ。」

きりのなかを走る馬車の上で、セーラはふあんそうにおとうさんを見あげました。

「やっとついたよ、セーラ。」

おとうさんのがっしりしたうでがセーラをだきよせました。こうして、おとうさんのたくましいむねによりそえるのもきょうだけだと思うと、セーラのむねはさびしさでいっぱいになるのでした。

セーラはおとうさんといっしょに、インドのボンベイから船でイギリスのロンドンへやってきたのです。インドでしごとをしているイギリス人の子どもたちは、七さいになると学校へはいるためにイギリスへ帰ります。

おとなたちはしごとがありますから、子どもを学校にあずけるとインドへ帰ってしまいます。つまり、子どもたちは、ひとりぼっちでイギリスの学校へ通うのです。学校には教室のほかに生徒たちがねとまりするためのへやもあります。

イギリスには、そういう生徒たちをあずかる小さな学校がいくつかありました。

セーラが五つのとき、おとうさんに聞いたことがあります。

「パパはいっしょに学校へいけないの。」

「なあに、パパといるより学校のほうがずっと楽しいさ。」

そういうおとうさんの顔もちょっとさびしそうでした。セーラは二年も前からきょうのことをしんぱいしていたのです。

セーラはおかあさんの顔を知りません。セーラをうむとすぐ、びょうきをしてしんでしまったからです。おとうさんがおかあさんの分までかわいがってくれたので、さびしい思いをしたことはいちどもありません。

セーラは自分でお話を作ったり、とんでもないことを考えたり、そうぞうしたりするのがすきな子でした。ときどき、自分がイギリスへいく日のことを考えたこともあります。けれども、そんなときは、あわててべつのことを考えたり、そうぞうしたりしました。

きょうのことを考えるのがおそろしかったのです。

(七さいになりたくない、七さいになりたくない……)

と、おまじないのようにとなえたこともありました。しかし、ついにその日はきてしまったのです。

「そろそろつくよ、セーラ。」

おとうさんがやさしい目でセーラをみつめました。

「パパ、もう少し……もう少し、町を走っていいでしょ。」

「遠まわりをするのかね。」

「馬がもっと走りたがってるわ。」

「はいはい、しょうちしました。小さなおくさま。」

セーラのととのった顔に、はじめてほほえみがうかびました。

小さなおくさま――それはおとうさんのつけたセーラのあだ名でした。小さいけれどおかあ

さんのようにしっかりしているセーラにぴったりのあだ名です。インドのおやしきでは、おとうさんだけではなく、おてつだいさんやコックさんまでがセーラを「小さなおくさま」とよびました。

そうよばれるとセーラは、自分がおかあさんのかわりになったような気もちになるのでした。

セーラは、楽しかったインドでのせいかつを思い出すように馬車の上で目をとじました。

「十年ぐらいすぐたってしまうよ。」

セーラのやわらかくて長いかみをなでながらおとうさんはいいました。

本当にすぐでしょうか。セーラは七さいです。十年ということは……考えただけでおそろしくなりそうな長い時間です。

ことわっておきますが、セーラはけっしてさびしがりやではありません。みんなとわいわいさわいでいるより、ひとりでぼんやりしているほうがすきです。インドにいるときだって、しごとのいそがしいおとうさんは、あまり家にいませんでした。

では、セーラはべんきょうがきらいなのでしょうか。いいえ、セーラは本を読むのが大すきです。新しいことを知るのが大すきな子です。

学校にいかないうちに英語とインド語、そしてフランス語がぺらぺらです。

さびしがりやじゃなくて、べんきょうもきらいじゃないセーラが、なぜひとりで学校へいくのがいやなのでしょう。

それはロンドンで、なにかとてもおそろしいうんめいが自分をまっているような気がしたからです。セーラのそういうかんはふしぎとよく当たるのです。

「もういいでしょうか、小さなおくさま。」

おとうさんがおどけていいました。

馬車は町をひと回りして、ふたたび学校のそばにさしかかっていました。セーラは、こっくりとうなずきました。

もっともっとおとうさんと馬車にのっていたいけれど、きりがありません。

やがて、馬車はレンガづくりの大きなたてものの前でとまりました。

ミンチン女学校――

つめたそうなてつのひょうさつが、きりのなかでセーラを見おろしていました。

2 セーラからパパへ

インドのパパへ――

はじめてのお手紙を書きます。

この手紙を書きながらそっと目をとじると、おわかれの日にきりのなかへきえていったパパの馬車のひづめの音が聞こえてくるようです。わたしをおいてけぼりにしていってしまった、いじわるなパパ。うるさいむすめがいなくなって、せいせいしているんじゃないかしら。

わたしはさびしくて毎日なきながらくらしています。というのはうそ。もう学校にもすっかりなれました。校長のミンチン先生は、わたしをとてもかわいがってくれます。

わたしがかわいくて、べんきょうができて、すなおな女の子だからです。というのもうそです。わたしがみんなに大切にされるのは、パパのむすめだからなんです。なんでもわたしは、学校でいちばんお金もちのむすめなんですって。

たしかにわたしは小さいときからパパのおかげで、なんのふじゆうもなくくらしてきました。

でも、わたしは自分がお金もちのむすめだなんて思ったことがありません。

だって、パパは自分がお金もちだとか、えらいんだとかいちどだってじまんしたことがないでしょ。そういうパパにそだてられたわたしが、お金もちなことをじまんしたりするわけがありません。

本当のことをいうと、パパがこんなにお金もちでゆうめいな人だとは知らなかったの。ミンチン先生やお友だちは、なにかというとパパの話をします。パパがどれほどすばらしい人かという話です。

ミンチン女学校でのわたしは、すばらしいパパのだいじなひとりむすめなんです。

ちょっとくやしいけど、わたしはパパのおかげでみんなにかわいがられているのです。

おへやも学校でいちばんごうかなへやです。

わたしのためのおてつだいさんもいます。

ほしいものがあればミンチン先生にいうと、すぐ買ってもらえます。朝、わたしが教室にはいると、お友だちがわっととりかこんで、わたしは王女さまみたいです。

みんなみんな、パパのおかげです。

でも、ひねくれやさんのわたしは、これだけはパパのせわにならないで、自分の力でみつけ

ようとしました。

それはお友だちです。

わたしをえらいパパのむすめではなく、おませなひとりの女の子として、つきあってくれるお友だち。それがいたんです。三人も！

きょうは、その三人のお友だちのことを書きます。まず、わたしのかいた三人のにがお絵を見てください。いちばん右はしの女の子はアーメンガード・セント・ジョンです。ずいぶん長ったらしい名前でしょ。わたしはアーミーってよんでいます。パパもアーミーっておぼえてね。絵を見てわかるとおり、ちょっとおでぶさんなの。やせっぽちのわたしとは、なにからなにまではんたいなの。

わたしは本がすき。アーミーは字を見ただけで頭がいたくなるんですって。

わたしはめったにないたりしないけど、アーミーは、と

ってもなき虫でおくびょうなの。
なぜ、そんなアーミーとお友だちになったかというと、ほら、いつかパパがいったでしょう。
「セーラが男の子で、もっとむかしに生まれていたら、刀をぬいて、国じゅうのこまっている人のためにたたかったんじゃないかね。」
そうなんです。だれかがこまっていたり、つらい目にあっていると、わたしは見ていられなくなってしまうの。
その日もアーミーはフランス語のはつ音がうまくできないで、先生にしかられて、みんなにわらわれていたんです。
じゅぎょうがおわってもしょんぼりしているアーミーに、わたしは話しかけてみたの。
「はじめまして。わたし、こんど入学してきたセーラ・クルーよ。」
アーミーはびっくりしたようにわたしをみつめると、どもりながら小さな声でいいました。
「わ、わたし、アーメンガード・セント・ジョンっていうんです。」
「きれいなお名前。おとぎ話のしゅじんこうみたいね。」
おせじじゃありません。わたしは本当にそう思ったの。
「あなたの……お名前も……すてき……」

アーミーはもじもじしながら、わたしをみつめました。とってもやさしそうな、かわいらしい目なの。わたしはいっぺんにアーミーがすきになってしまいました。

それから、アーミーはわたしのおへやによくあそびにくるようになりました。

そして、アーミーがなぜべんきょうや本を読むのがきらいなのかがわかったのです。アーミーのおとうさんは、りっぱな学者なの。朝からばんまで本を読んでいるんですって。それも、せかいじゅうからとりよせた本を、じしょもひかないで読んじゃうんですって。

頭のいい人っていうのは、自分がすらすらできることをほかの人ができないと、わらったり、ばかにしたりするでしょ。アーミーのおとうさんもそうなの。

「どうして、おまえは、こんなかんたんなことがわからないんだ。」

アーミーは、おとうさんに「頭がわるい。」とか「ものおぼえがわるい。」とかいわれながら大きくなったの。

そして、自分もいつのまにか、「わたしは頭がわるいんだ。」と思いこむようになってしまったのね。

もし、アーミーのおとうさんがパパのような人だったら、アーミーは本をよく読むべんきょうずきな子になっていたような気がするの。

アーミーのことはこのくらいにして、二番目のお友だちをしょうかいします。

前のページのにがお絵をもういちど見てください。

まんなかのおちびさん、この子がロッティーです。ロッティーはまだ四さいです。うちのつごうで、ふつうの子より早くミンチン女学校にあずけられているんです。

もちろん、学校でいちばん小さい女の子です。先生も生徒も、ロッティーにはものすごく気をつかっています。気に入らないことがあると、ないておどかすのよ。とにかくすごいなき声なの。

うわあん――うわあん――

字で書くとこんなかんじだけど、パパだって思わず耳をふさいじゃうわ。さすがのミンチン先生もロッティーがなきだすと、あきれて自分のおへやへ帰っちゃうくらいなんですから。ロッティーはなきだしたらさいご、つかれきって声が出なくなるまでとまらないの。おまけになきながらさけぶのよ。

「うわあん、うわあん、おかあちゃんがいないいんだもの！」

そうなんです。ロッティーがなきながらいう、たからもののようなことばが「おかあちゃんがいない。」なんです。

ロッティーは「おかあちゃんがいないんだもの。」とわめけば、なんでも自分の思いどおりになるとしんじているの。きっとまわりのおとなたちが、おかあさんのいないロッティーにやさしくしすぎたんだと思うわ。
だから学校へはいってからも、自分のいい分がとおらないと、「おかあちゃんがいないんだもの。」となきわめくのね。
わたしがはじめて、ロッティーと会ったのもそんなときだったの。
ロッティーはろうかのまんなかにひっくりかえってないていました。
「うわあん、うわあん、おかあちゃんがいないんだもの!」
みんなはロッティーのこんなさわぎには、なれっこになっているので、だれもあいてにしません。それでもロッティーは足をばたばたさせてなきやもうとしないの。
「ぎゃあ! おかあちゃんがいないんだもの!」
わたしは、なきわめいているロッティーのそばにいくと、にっこりしていったの。
「わたしもおかあさんがいないの。」
そのときのロッティーの顔ったら! パパに見せられないのがざんねんだわ。まるでまほうにかかったように、ぴたりとなきやんで、ロッティーはわたしを見あげたわ。

でも、きゅうになきやむのはおかしいと思ったんでしょうね。また、しくしくなきだして、わたしに聞いたわ。
「ママは……どこへいったの。」
「わたしのママは天国へいらしたのよ。きっといまごろ、天国でロッティーのママとお友だちになってるかもしれなくてよ。」
「あたしのママと？」
「わたしたちもお友だちになりましょうか？」
わたしはハンカチを出して、ロッティーのなみだをふいてあげたの。
「お友だちになるより、おかあさんになってあげたほうがいいかしら？」
「おかあちゃんがいい！」
ロッティーはさけんで、わたしにしがみついてきました。
こうして、わたしはロッティーのおかあさんになることになりました。
なんだかずいぶん長い手紙になってしまいました。もう少しでおわりですから、がまんしてさいごまで読んでね、パパ。
また前のページのにがお絵を見てください。

左はしの女の子が三人目のお友だち、ベッキーです。ベッキーは生徒ではありません。
パパも知っているとおり、わたしはお話を作ってみんなに聞かせるのが大すきでしょ。
わたしはいつものようにアーミーやロッティーやほかのお友だちに、インドのお話を聞かせてあげてたの。
わたしはむちゅうで話しながら、なんとなくドアのほうが気になりました。だれかが、そっとわたしの話を聞いているような気がしたの。わたしがドアのほうを見ると、おもいせきたんばこをもった小さな女の子が、おどおどしたかんじではいってきたの。
年はわたしと同じくらいだけど、きているようふくはつぎだらけで、顔はせきたんのかすでうすよごれていたわ。
わたしが話をつづけると、その女の子はわざとゆっくりとストーブにせきたんをくべはじめたの。
(わたしの話を聞いていたいんだわ……)
わたしは、その女の子によく聞こえるように声をはりあげました。すると、どうでしょう。女の子の目がいきいきとかがやいてきたのよ。そうなの、パパ。このせきたんはこびの女の子がベッキーなの。そのときは、ベッキーとはひとことも話さなかったの。

ところがそれから、二週間ほどたったある日の午後、わたしをびっくりさせるようなことがおこったんです。

ドアをあけておへやにはいると、ベッキーがいたんです。わたしのいちばんすきなあんらくいすにこしかけて。その前では、ストーブが赤あかともえています。

びっくりしたわたしは、そっとベッキーに近づきました。ベッキーは、とても気もちよさそうにねむっていました。わたしは、おこる気にはなれませんでした。

学校じゅうのへやというへやにせきたんをくばって歩くのがベッキーのしごとです。おもいせきたんばこをもって、長いろうかやきゅうなかいだんを一日じゅう歩きつづけているんです。

わたしのへやにきて、ほんのちょっといすにすわっているうちに、ねむってしまったのよ、きっと。

「かわいそうに。つかれているのね。」

いつまでもそっとねかしておいてあげたいと思いました。わたしはまよいました。こんなところをミンチン先生にみつかったらベッキーはおい出されてしまうかもしれません。

かといって、こんなにいい気もちでねむっているベッキーをおこしたくありません。

（どうぞ、だれもはいってきませんように……）

わたしはむねのなかでいのりました。

それからどうなったと思う？　パパ。黒いせきたんがベッキーをおこしてしまったの。ストーブのなかでいきおいよくもえていたせきたんのかけらのひとつが、ごとんと音をたててくずれたの。

「おじょうさま……」

びくんとおきあがったベッキーは目の前のわたしに気づくと、いまにもなきだしそうな顔をしました。

「いいのよ。」

「おゆるしください。ねむるつもりじゃなかったんです。あんまり、あたたかくて気もちがよかったもので、つい……おゆるしください。」

ベッキーはなきながら、わたしにあやまるのです。

「あなたはつかれていたのよ。もっとねむらせてあげられるといいんだけど。」

「おこっていらっしゃらないんですか。おじょうさま。」

ベッキーは、しんじられないような顔つきでわたしを見たの。

「いいえ。」

「ミンチン先生にいいつけないんですか。」
「いいえ。」
わたしはえがおでとだなのケーキをとり出すと、できるだけあつく切ってあげました。
「おなかがすいているんでしょう。」
「おじょうさま……」
「わたしはセーラ・クルー。あなたと同じふつうの女の子よ。」
ベッキーはケーキをおいしそうにほおばりました。
「あなた、お話を聞くのがすきなんでしょ。」
「は、はい……」
「わたし、これからは、あなたがせきたんをはこんでくる時間に、なるべくおへやにいるようにするわ。」
ベッキーはどういういみかわからないらしくて、ぽかんとしていました。
「そうすれば毎日、少しずつお話を聞かせてあげられるでしょ。」
「おじょうさま。わたしのために、わざわざお話をしてくださるのでございますか。」
「ええ。だって、この間はだれよりもねっしんに、わたしの話を聞いていてくれていたでしょ。」

「ごぞんじだったんですか。おじょうさま。」
あのときのいきいきしたベッキーの目のかがやきを、わたしがわすれるはずがありません。
そして、ベッキーはつぎの日からわたしのおへやにやってくると、できるだけゆっくりとせきたんをくべていくようになったの。
わたしは、ベッキーのために、インドからロンドンへくる船の話や、自分で作った人魚のものがたりを聞かせてあげます。それは、ほんのみじかい間だけど、ベッキーにとっても、わたしにとっても楽しいひと時になっています。

パパ……これでお友だちのしょうかいをおわります。アーミー、ロッティー、ベッキー、みんなすばらしい女の子だってことがわかっていただけて？　でも、わたしが、こんなに長い手紙をだらだらと書いたのは、三人のお友だちをパパにしょうかいするためにだけではありません。
これだけ長い手紙を書けば、パパもこの半分ぐらいの長さの手紙をわたしに書いてくれるのではないかとまちのぞめるからです。
パパの手紙はいつもみじかくて、一回読むとぜんぶおぼえてしまうわ。

たまには長い手紙をください。毎日少しずつだいじにだいじに読みたいと思います。

インドのいそがしいパパへ――

きりのロンドンのわがままなむすめ
小さなおくさまのセーラより

3　セーラがきらい！

セーラがいっしょうけんめいまっているのに、パパからのへんじはなかなかとどきません。

（きっとおしごとがいそがしいんだわ……）

セーラは自分にいいきかせるのでした。

では、パパのへんじをまつ間に、セーラが手紙に書いてない人たちのことを書くことにしましょう。

セーラはかみさまではありません。だから学校のなかには、セーラがきらいだという人もいます。ほんの少しですけど、そういう人がいるのです。

セーラはおとうさんにしんぱいをかけないように、そういう人たちのことを書かなかっただけです。

「なによ。まるで王女さまのつもりだわ。」

「こんどから王女さまってよんでやりましょうよ。」

みんなにとりかこまれているセーラのすがたを見て、いまいましそうに顔を見合わせるのは、ラビニアとジェッシーです。

みなさんの教室のなかにもいませんか。学校の行き帰りはもちろん、トイレへいくのもいっしょだというなかよしのふたり組が。

ラビニアとジェッシーはふたごのようにいつもいっしょのコンビなのです。しかもラビニアはセーラが入学してくるまでは、教室の女王だったのです。みんながみんなすいていたわけではありませんが、セーラがくるまではクラスの花形でした。それがあっというまに、セーラに人気をうばわれてしまったのですから、ラビニアはおもしろくないのです。

もっとも、ラビニアとジェッシーは、かげでこそこそとセーラのわる口をいうていどで、セーラの目の前でいじわるをするようなことはしませんでした。そんなことをしたら、ますますクラスで人気がなくなってしまうことを知っていましたから。

そのジェッシーでさえ、うっかりとセーラをほめて、ラビニアをおこらせたことがありました。

「ねえ。ラビニア、セーラはこのクラスでいちばんべんきょうができて、りっぱなようふくをいっぱいもってて、みんなにすかれているのに、ちっともいばったりしないのね。」

本当にジェッシーのいうとおりでした。でも、ラビニアにしてみれば、いやみをいわれているように聞こえたのです。

セーラが入学してくる前のラビニアは、べんきょうができることも、きれいなようふくをいっぱいもっていることも、みんなじまんのたねにしていたのですからね。

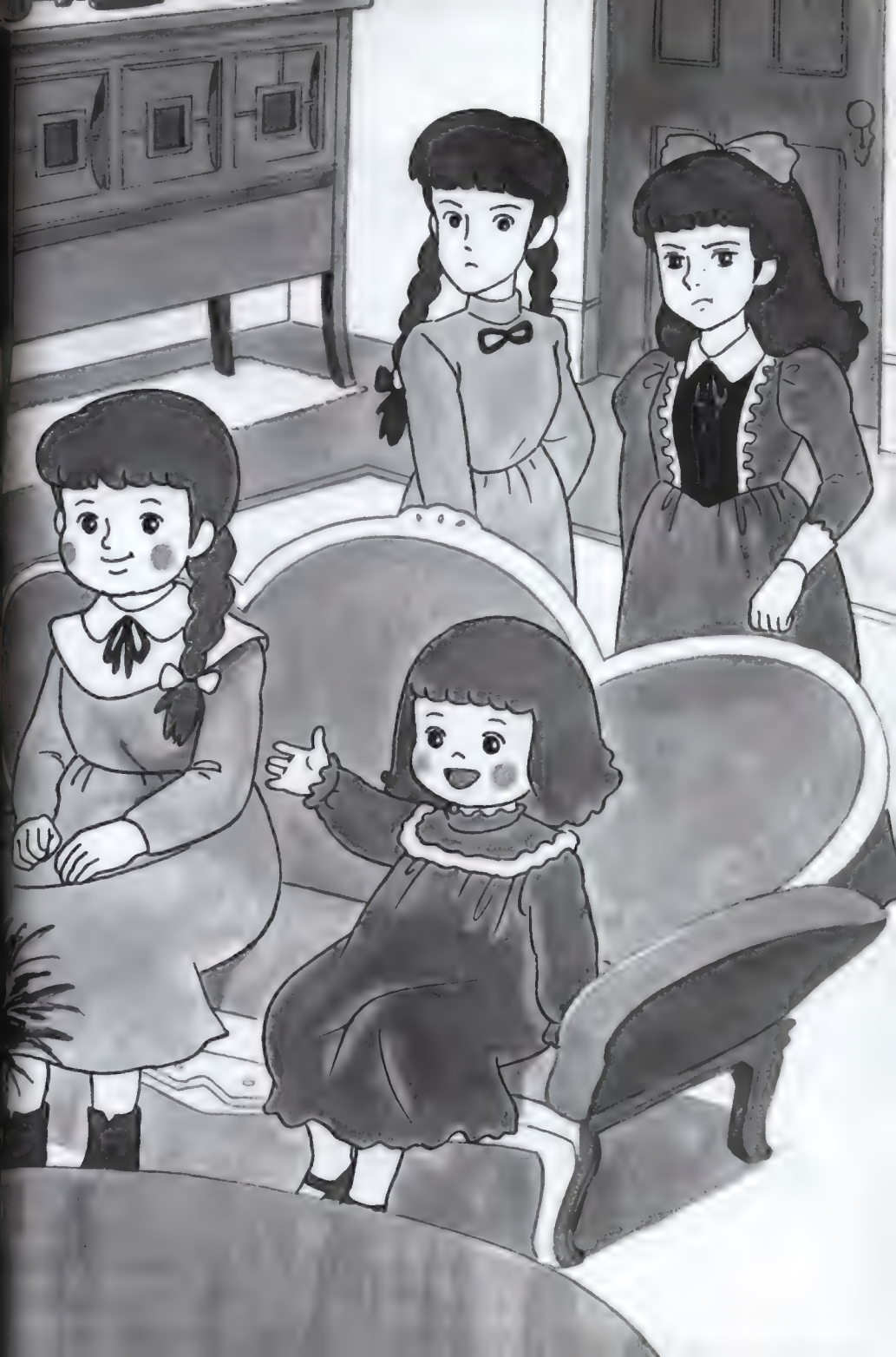
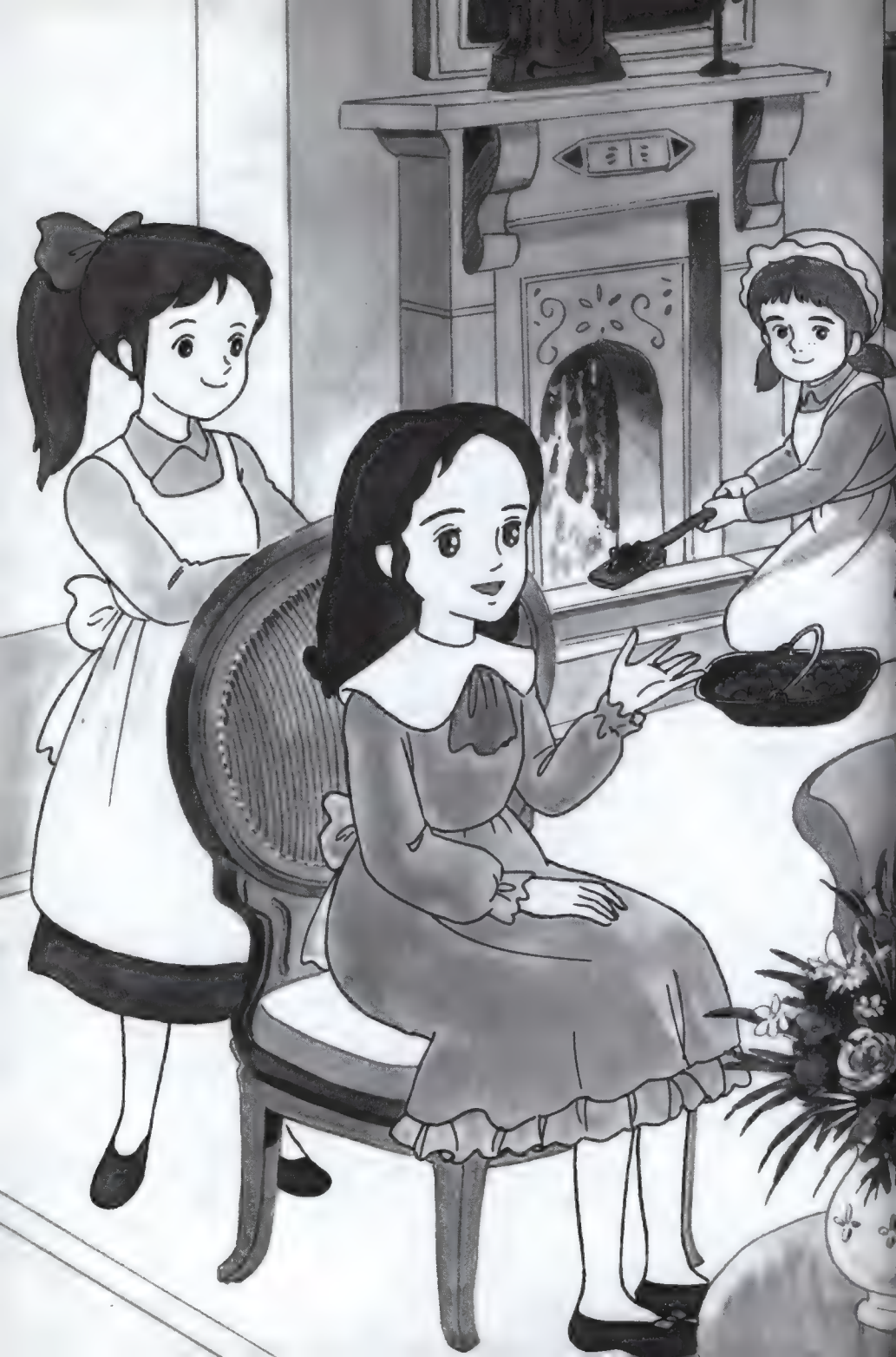
（どれほどわたしのほうがすてきかわからないわ……）

ラビニアは心のなかでいつもつぶやいています。せいせきだってわるくないし、顔だちだって、見る人によってはラビニアのほうがうつくしいと思うかもしれません。

ただ、ラビニアがさかだちしてもセーラにかなわないものがあります。セーラの「お話」です。せきたんをはこんできたベッキーが聞きほれてしまったように、セーラの「お話」にはみんなをとりこにするまほうのような力があるのです。

きらいだ、きらいだといいながらも、ラビニアもジェッシーもセーラの「お話」のうまさだけはみとめないわけにはいきません。

そのしょうこに、みんなの後ろでなんとなくきまりわるそうな顔で、セーラの「お話」に耳をかたむけているラビニアとジェッシーのすがたをよくみかけることがあります。

さいしょは聞かないつもりでも、いちど聞きだしたら、さいごまで聞かずにいられないほど

セーラの「お話」はおもしろいのです。
ラビニアとジェッシーがセーラがきらいだということは、クラスのみんなが知っています。ふたりとも、顔ではにこにこして、心のなかではきらいだと思うような、きようなことはできません。
だから、だれにでもふたりがセーラがきらいだということがわかるのです。
その点、おとなはちがいます。
顔でわらっていても、心のなかはにえくりかえっているようなことがよくあります。この学校にもそういう人がいたのです。
だれだと思いますか。
セーラの手紙をよく読んだ人はわかるかもしれません。
それはミンチン先生です。この学校でいちばんえらいミンチン先生こそ、セーラが大きらいなのです。ミンチン先生は、はじめてセーラを見たときから、なんとなく気にいらなかったのです。
セーラはじっさいの年よりずっとおとなっぽく見えたし、そのすんだひとみは、なんでも見通してしまうような強い光をもっていました。

（この子はゆだんできないわ……）
長い間、おおぜいの生徒たちのめんどうを見てきたミンチン先生のかんはたしかでした。
どうしようもないほどべんきょうがきらいなアーミーが、少しずつべんきょうがすきになったのもセーラとつきあうようになってからです。
火のついたようになきだして、どの先生も手におえなかったちびっ子ヒステリーのロッティーも、セーラがおかあさんがわりになってから、聞き分けのある子になってきました。
アーミーもロッティーもミンチン先生があきらめた生徒です。そういう子がいい生徒になってきたのですから、よろこばなければいけないのに、ミンチン先生は、はらがたつのです。自分の力では、どうしようもなかったことを、セーラにあっさりやられてしまったことがくやしいのです。
ほら、みなさんもこわれてつかえなくなってしまったおもちゃをすててしまったら、それをだれかがひろってなおして、前よりもぐあいよくつかっているのを見たら、なんとなくそんをしたような気もちになるでしょう。
ミンチン先生の気もちもそれと同じでした。
しかし、ミンチン先生はラビニアやジェッシーのように、セーラのわる口をいったりしませ

ん。かえって、はんたいにほめていたのです。

「みなさんもセーラをみならいなさい。どうして、セーラのようにできないんですか。」

もし、ミンチン先生がセーラをしかったりしたら、いじわるをしているように見られてしまうでしょう。

それほど、セーラのやることはかんぜんだったのです。しかりたくてもしかれなかったのです。

ほかにもりゆうがあります。インドにいるセーラのおとうさんからは、毎月たくさんのお金がミンチン先生のところにおくられてきます。お金だけではありません。えらい人のひとりむすめをあずかっているということは、ミンチン女学校にとって、せんでんになるのです。

日曜日になるとミンチン女学校の生徒たちは、二れつにならんで近くの教会までおいのりにいきます。そんなとき、ミンチン先生はセーラにいちばんいいようふくをきせて、先頭を歩かせます。

ビロードのうわぎにだちょうのはねかざりのついたぼうしをかぶったセーラは王女さまのように見えます。そのすがたは道ゆく人たちがふりかえるほどでした。

先頭を歩く子どもがりっぱだと、そのあとにつづく子どもたちまでりっぱに見えることをミ

ンチン先生は知っていました。りっぱな生徒がおおぜいいるということは、ミンチン女学校がりっぱな学校だと思われるのです。

だからミンチン先生は、ぎょうれつの先頭には、いつもいちばんいいようふくをきている子を歩かせるのです。セーラがくる前はラビニアでした。

「わたしは新入生ですからいちばん後ろでけっこうです。」

そういうセーラを、ミンチン先生はむりやりに先頭にしました。ラビニアの気もちなんかおかまいなしでした。

自分よりいいようふくをきているというだけで、ラビニアは先頭を歩かせてもらえなくなってしまったのですから、セーラをうらみたくもなります。

とにかく、これほど子どもたちの気もちを考えない先生はいないでしょう。そのくせ、生徒たちのおとうさんやおかあさんがあいさつにきたりすると、きまってこういうのです。

「本当によくできたお子さんで、教えるのもはりあいがございます。おほほ……」

子どもをほめられておこる親はいません。

どの親もミンチン先生にたくさんのプレゼントをわたしてあんしんして帰ってしまうのです。

セーラは、そんなミンチン先生の正体を見ぬいていました。

ミンチン先生がセーラをすきでないということもセーラは知っていたのです。
セーラがおとうさんに手紙を出して半年もたったある日、だれかがドアをノックしました。
ミンチン先生が一通のふうとうを手に立っていました。
「おとうさまからのお手紙ですよ。」
「パパからですか！」
セーラは思わず大声を出してしまいました。
ついにきたのです。インドのパパからまちにまったへんじがとどいたのです。

4　パパからセーラへ

パパの小さなおくさま――

へんじがなかなかとどかないので、つのを出しておこっているんじゃないかな。

じつはへんじがおくれてたのは、パパが新しいしごとにとりくんでいたからなんだ。

新しいしごと。セーラがいくらかんのいい子でも当たらないだろう。それとも、このパパの手紙がぴかぴか光って見えるかね。

そろそろ、わかってきたかね。ぴかぴかはほうせき、ほうせきはダイヤモンド。そうなんだよ。パパの新しいしごとはダイヤモンドをほるしごとなんだ。

パパのなかのいい友だちのもっている山に、たくさんのダイヤモンドがあることがわかってね。パパはその友だちにダイヤモンドをほるしごとをてつだってくれとたのまれたんだ。

ダイヤモンドをほるといっても、ほうせきやさんに売っているようなダイヤが、かんたんにほれるわけではない。とてつもなくたいへんなしごとなんだよ。

もちろん、パパにとってははなれないしごとだから、いままでのなんばいもいそがしくなる。手紙もあまり書けないと思うけど、ミンチン先生のいうことをよく聞いてべんきょうしてほしい。

こんどセーラと会うときは、小さなおくさまのからだじゅうをダイヤでかざってあげよう。

小さなおくさま　セーラへ

いそがしい　いそがしい
インドのパパより

パパの手紙はセーラが思っていたよりずっとみじかいものでした。けれどもそのなかみはすばらしいものでした。自分の作るお話のなかにはダイヤの山やさんごの林をよく出していたセーラも、まさかパパがダイヤモンドの山を手に入れたなんて、そうぞうもしたことがありません。

セーラはパパの手紙を、なんどもなんども読みかえしました。

自分ひとりではしんじられなくなって、アーミーにも読ませました。

そして、このゆめのような話は、あっというまに学校じゅうに広まりました。
「セーラのパパがダイヤモンドの山を手に入れたんですって。」
「あれいじょうお金もちになってどうするのかしら？」
「ダイヤモンドでできた山なんて、おとぎ話みたい。」
学校じゅうが、ダイヤモンドのうわさでもちきりになっていました。
大さわぎなのは生徒だけではありません。
ミンチン先生は、ほかの先生たちにいいました。
「セーラ・クルーにはとくに気をくばってやりなさい。」
ダイヤモンドがほり出されないうちに、セーラに学校をやめられたりしたらたいへんです。
心のなかではともかく、ミンチン先生はセーラにたいして、ますますやさしくなりました。
ラビニアだけが、ダイヤさわぎに知らん顔をしていました。
休み時間のことです。セーラが本を読んでいると、ラビニアの声がしました。
「ダイヤモンドの山なんかあるもんですか。」
わざとセーラに聞こえるようにいっているようです。
「つくり話よ。」

ラビニアの声はさらに大きくなりました。
セーラは本から目をはなします。
「セーラはお話づくりの名人ですもの。セーラのパパだって……」
セーラはかっとしてせきをたちました。
気がついたときはラビニアの前へ立って、手をふりあげようとしていました。こんなことは生まれてはじめてのことです。
自分のわる口ならがまんしても、大すきなパパのわる口はがまんできなかったのです。
「へえ、あたしをひっぱたくつもり？　王女さま。」
ラビニアが王女さまといわなかったら、セーラはラビニアのほおをぶっていたでしょう。
「ぶってやりたいけど……」
セーラはしずかにふりあげた手をおろしました。
「ぶってもいいわよ、王女さま。」
ラビニアはからかうようにセーラを見あげます。セーラはだんだんおちつきをとりもどしていました。
「王女さまは、人をぶったりしないものでしょ。」

「……」

ラビニアはそのとき頭がこんらんしてしまいました。いやみのつもりで「王女さま」といってやったのに、セーラはすっかり王女さまのつもりになっているのですから。

これではちょうしがくるってしまいます。

このままでは、ラビニアのまけです。なにかいいかえしてやらなければ……

「ダイヤモンドがみつかったら、あたしを家来にしていただけますか？　王女さま。」

ラビニアは、くるしまぎれにいいました。

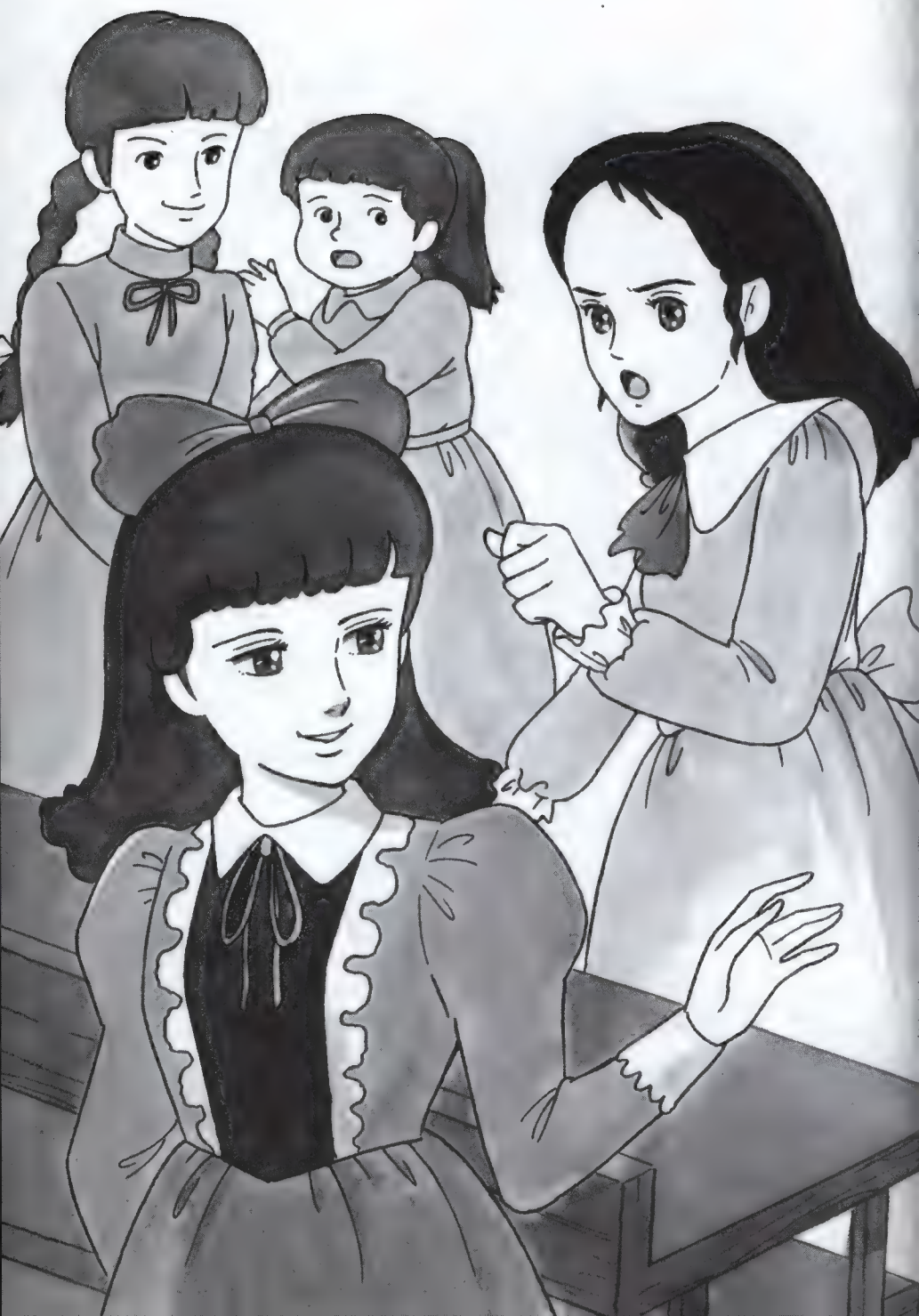
「ええ。よろこんで……」

セーラはまるで本当の王女さまのような足どりでへやを出ていきました。

かんぜんにラビニアのまけです。からかってやるつもりが、さいごには、家来にしてもらうことになってしまったのですから。

そのやりとりを目をまるくして見ていたアーミーは、あとでセーラにいいました。

「ほんものの王女さまに見えたわ。」

「ラビニアがわたしのことを王女さまっていうんなら、わたしは王女さまのつもりになっていようと思ったの。」

セーラはくうそうのすきな女の子でしたから「つもり」になるのは、とくいちゅうのとくいです。

「空のお星さまのつもりになったり、魚のつもりになって海のそこをさんぽするそうぞうをしたり……わたしは目をつぶると、どんなものにもなれるわ。」

「へえ。目をつぶっただけで。」

アーミーはふしぎでたまりません。アーミーはどんなにきつく目をつぶったって自分にしかなれないのです。

「どうしたら、そんなふうになれるの。セーラ。」

「本をいっぱい読んだからかしら。わたしは本を読むと、すぐしゅじんこうになったつもりになっちゃうの。」

「へえ……」

本と聞いてアーミーはあきらめました。セーラのおかげでべんきょうはいくらかすきになりましたが、文字がぎっしりつまった本を読む気にはなれなかったのです。

セーラとラビニアのいさかいがあってから、生徒たちはセーラのことを「王女さま」とよぶようになっていました。もっともよび方には二つあります。ひとつはラビニアのように、いや

みたっぷりでよぶよび方。もうひとつは、ロッティーのように、心からそんけいして、「王女さま」とよびかけるやり方です。

　小さいロッティーはいつのまにか、セーラの家来のようになっていました。クラスがちがうのに、ひまさえあればセーラの教室にやってくるのです。

　そんなロッティーにとって、「王女さま」というよび名はべんりなものでした。自分より年上のセーラをよびすてにするのは気がひけたし、「セーラさん」というのもへんですし、いくらおかあさんがわりだからといって、「ママ」とよぶのもへんです。

「やっぱり、王女さまってよぶのがさいこうよ！」

　ロッティーはすっかり王女さまの家来気どりでごきげんです。

　しかし、だれよりも「王女さま」がセーラにふさわしいよび名だと思っていたのは、せきたんはこびのベッキーでしょう。

　朝からばんまではたらかされているベッキーにとって、セーラのへやにせきたんをはこぶわずかな時間ほど楽しいひと時はありませんでした。

　楽しみはセーラのお話だけではありません。いつもおなかをすかしているベッキーのために、セーラはにくのたっぷりはいったパイやサンドイッチをスカートのポケットに入れてくれるの

でした。
それはのこりものなんかではありません。
セーラがわざわざ町へでかけて買ってきたものです。スカートのポケットにすっぽりはいって、えいようがあって、おいしいものをセーラがえらんでくるのです。
「おじょうさまは、どうしてわたしが食べたいものがおわかりになるのですか。」
ベッキーがふしぎそうにセーラにたずねます。おいしいにくまんじゅうが食べたいなと思っていると、セーラはまほうつかいのように、にくまんじゅうをスカートのポケットに入れてくれるのです。
「それはベッキーになったつもりで食べものをえらぶからよ。」
「おじょうさまがあたしになったつもりで？」
「そうよ。おなかをすかした女の子のつもりでお店の前に立つの。」
ベッキーにはさっぱりわかりません。目の前にいる王女さまのようなセーラが、うすよごれたせきたんはこびの女の子のつもりになるなんて。
とにかくベッキーにとって、セーラはめがみであり、本当の王女さまでした。
でも、セーラが「王女さま」とよばれるのをいちばんよろこんだのは、なんとミンチン先生

なのです。学校におきゃくさんがくるたびに、セーラの話をするのです。
「王女さま」とよばれている生徒が自分の学校にいるということは、ミンチン女学校までが、なんとなくりっぱな学校にみられるような気がするからでした。
おなかのそこではきらっていても、自分の学校のためには、ちゃっかりとセーラをりようしているのです。

5　うれしい十一さい

月日がたつのは早いものです。

セーラがミンチン女学校にはいって四年間がすぎました。セーラは十一さいになろうとしていました。

あのなきむしのおちびさん、ロッティーももう七さいですから、セーラがこの学校にきたときと同じ年になったわけです。

もうすぐ十一さいのたんじょう日をむかえるというある日、インドのおとうさんからセーラに手紙がとどきました。

(パパになにかあったんだわ……)

手紙のあて名の字を見たとき、セーラはどきんとしました。いつものたくましいパパの字ではありません。ひょろひょろとしたたよりない字なのです。

セーラはむねをどきどきさせながら、ふうを切りました。

セーラ……
パパはとってもつかれている。
なれないダイヤモンドの山のしごとでくたくただ。
こんなときに、小さなおくさまがいてくれたら、たすかるんだけどね。

たったそれだけのみじかい手紙です。これだけのことを書くのがやっとといったかんじです。手紙のさいごのほうはインクがかすれていました。
(パパはびょうきなんだわ……)
手紙にはひとことも書いてありませんが、セーラはパパのからだがふつうでないことがわかりました。
セーラはいそいでへんじを書きました。

パパ……
わたしはダイヤモンドなんかいりません。
わたしのダイヤモンドはパパです。

ぜったいにむりをしないでください。
からだのぐあいはいかがですか。本当のことを教えてください。
わたしはいつでもインドへとんで帰ります。
だってわたしはパパの小さなおくさまですもの。

へんじのかわりに、パパからのすばらしいおくりものがとどきました。パパがわざわざパリにちゅうもんしてくれた大きなお人形です。
お人形といっしょについてきたおいわいのカードの字は、元気なときのパパの字でした。
（パパは元気になったんだわ……）

そして、セーラは十一回目のたんじょう日をむかえたのです。ミンチン先生のきぼうでセーラのたんじょうパーティーは学校はじまっていらいのはなやかなものになりそうです。
パーティーの日の朝、さっそくプレゼントがとどきました。それは茶色の紙につつんだ小さなものです。
（ベッキーだわ……）

セーラはすぐわかりました。そっとあけてみると、フランネルというやわらかいぬので作ったはりさしでした。とても、きれいとはいえないものです。はりさしには黒い頭のまちばりがなん本かさしてありました。

「あら……」

はりをよく見たセーラは目をまるくしました。黒いはりで「オメデトウゴザイマス」という字が書いてあったのです。

「ありがとう、ベッキー。」

セーラは、うれしくてなみだぐみそうになりました。

学校へ通ったことのないベッキーは、ほとんど字が読めません。そのベッキーが、たどたどしい字で「おめでとう」をいってくれたのです。

（どんなにたいへんだったでしょう……）

ねむい目をこすりながらプレゼントを作ってくれたベッキーのすがたを思いうかべて、セーラはむねをつまらせました。

（あら……）

おくりぬしのカードを見たセーラは、へんに思いました。ベッキーではないのです。きれい

な字で、

『ミセス・ミンチン』と書いてあります。

（へんだわ……）

みえっぱりのミンチン先生が、こんなぶかっこうなプレゼントをくれるわけがありません。

そのとき、ドアがそっとひらいてベッキーのしんぱいそうな顔がのぞきました。

「……お気にめしましたでしょうか。おじょうさま。」

「やっぱり、あなただったのね！　ありがとう。本当にありがとう！」

ベッキーはゆめを見ているようでした。セーラがこんなによろこんでくれるなんてそうぞうもしなかったのです。

「ありがとうございます！　おじょうさま。」

おくりぬしがおれいをいうのはあべこべですが、ベッキーはいわずにはいられなかったのです。

うれしなみだがぽろぽろとベッキーのほおをながれました。

「おじょうさま。うれしくてもなみだが出るんですね。」

つらいときにしかなみだをながしたことがないベッキーは、とんでもないことをはっけんし

たようにいいました。
そんなベッキーを見ていると、セーラもしらずしらずのうちになみだぐんでしまいます。
「ベッキー……このすばらしいおくりものに、どうしてミンチン先生のめいしがついてるの。」
「おくりものには、めいしをつけなくてはいけないと思ったんですけど、わたしはめいしなんかありませんから……それで……」
ベッキーはちりとりのなかにすててあったミンチン先生のめいしをつかったのでした。
「そうだったの……ベッキー。」
セーラはそんなベッキーが、たまらなくすきになって、ぎゅっとだきしめました。
「いけません。おじょうさま。だいじなドレスがよごれます。」
そんなときでも、ベッキーは、セーラのきていた白いドレスに自分のふくのせきたんのかすがつくことをしんぱいしているのです。
「ドレスは買えるわ。こんなすてきなプレゼントは、どこへいったら買えるの。」
「おじょうさま……」
ベッキーは声をあげてなきました。
なきながらセーラのからだのぬくもりをぜんしんでかんじていました。

（人間のからだって、なんてあたたかいんでしょう……）
みなし子のベッキーが、はじめてあじわうあたたかさでした。
「おじょうさま……」
もうベッキーは、セーラのドレスのよごれは気にしません。はじめてのあたたかさをむさぼるようにあじわっていました。
「ベッキー、わたしのたんじょうパーティーに出て。」
「わたしが、パーティーに？」
ベッキーはおどろいてセーラからはなれました。せきたんはこびの女の子が、学校一の生徒のパーティーに出たら、どんなことになるかをいちばん知っているのはベッキーでした。
「セーラ、気でもちがったんじゃないでしょうね。」
思ったとおり、ミンチン先生は顔色をかえてはんたいしました。
「ベッキーは、わたしのお友だちなんです。」
「まあまあ、せきたんはこびのベッキーが、王女さまとよばれているあなたのお友だちですって！」
ミンチン先生はあきれてものもいえないというようにセーラをみつめました。

けっきょく、ミンチン先生はセーラのねっしんさにまけて、ベッキーをプレゼントのはこをはこぶかかりにしてくれました。
「ありがとうございます。おじょうさま。」
たとえおてつだいやくでもパーティーの会場にいられるということは、ベッキーにとってゆめのようなことでした。
「ごめんなさいね。あなたをせいしきにしょうたいできなくて……」
セーラはすまなさそうにあやまるのでした。

6　かなしみのパーティー

「みなさん！　セーラさんはきょう十一回目のたんじょう日をむかえることになりました。」
生徒たちのはく手にむかえられて、セーラの手を引いてあらわれたミンチン先生は、みんなを見まわしてえんぜつをはじめました。
セーラはまっ白なすその長いドレスをきて、かがやくようなうつくしさです。ミンチン先生も、とってもおきのきぬのようふくをきて、とてもうれしそうでした。
「セーラさんのおたんじょう日は、ほかの人のおたんじょう日とはちがいます。」
ミンチン先生のことばにラビニアとジェッシーがささやきあいました。
「セーラさんですって。」
「ほかの人とちがうですって？」
ミンチン先生が生徒の名前に「さん」をつけたのは、はじめてではないでしょうか。
「セーラさんには、だいじなしごとがあります。おとうさまのたくさんのざいさんをついで、

りっぱなことにつかうおしごとです。」
「ダイヤモンドの山ね。」
ジェッシーがくやしそうにつぶやきます。
「セーラさんは、この学校でもっともりっぱな生徒さんです。セーラさんのフランス語とダンスは、この学校のほこりです。」
ミンチン先生のえんぜつを聞いているうちに、セーラははずかしくなって、うつむいてしまいました。
ものすごくたくさんのざいさんをつぐことが、りっぱなしごとでしょうか。セーラがお金もちなのは、おとうさんのせいでセーラの力ではありません。
ミンチン先生のしゃべり方を聞いていると、お金もちの子はみんなりっぱな生徒ということになってしまいそうです。
ミンチン先生はセーラのりっぱさとおとうさんのすばらしさをながいことしゃべりつづけました。
セーラは、ほめられればほめられるほど、ふゆかいになってくるのでした。
それでも、ようやくミンチン先生のえんぜつはおわりました。

「では、こんなりっぱなパーティーをひらいてくださったセーラさんに、みなさんでおれいをいいましょう。」
生徒たちは声をそろえていいます。
「セーラさん。ありがとう。」
いちばん大きな声をはりあげたのはロッティーでした。セーラは、はずかしくて顔を赤らめながら、スカートをつまんでおじぎをしました。
「みなさん、ようこそいらっしゃいました。」
セーラは、へやのすみに立っているベッキーのほうにかるくほほえみました。
ベッキーはうっとりとセーラをみつめています。
「なんてうつくしいおじぎなんでしょう。本当の王女さまみたいですよ。」
ミンチン先生は、はじめからさいごまで、セーラをほめると、ほかの先生によばれて、へやを出ていきました。
ようやくかたくるしいふんいきがなくなって、生徒たちははしゃぎはじめました。
ベッキーがほかのおてつだいさんたちと、たくさんのプレゼントのはこをはこんできます。
「わあ……おいしそう。」

アーミーがテーブルの上にならんだ色とりどりのごちそうに目をかがやかせます。
「おめでとう！　セーラ。」
「王女さま。おめでとう。」
「ねえ、王さまからのプレゼントを見せてもらってもいい？」
ロッティーがセーラに聞きます。
「王さまのプレゼント？」
「だって、王女さまのおとうさんは王さまでしょ。」
まじめな顔でいうロッティーに、みんなは大わらいでした。セーラは、おとうさんがおくってくれた大きな人形のはこをあけました。
それは小さな子どもほどもある大きな人形でした。
きせかえセットになっていて、ドレスからふだんぎまで、ほんものと同じようなふくが五ちゃくもはいっています。
生徒たちは、ためいきをもらしました。
なるべくセーラからはなれるようにしていたラビニアとジェッシーも、思わずみをのり出してしまうほどのすばらしさでした。

「しずかになさい！　パーティーはとりやめです！」
とつぜん、かん高いミンチン先生の声がひびきました。へやの入り口のところに、まっ青な顔色をしたミンチン先生が立っていました。
セーラもほかの女の子たちも、なにがなんだかさっぱりわかりません。
「パーティーはとりやめだといっているんです！　みんないそいで自分のへやにもどりなさい。セーラはここにのこるんです。」
ついさっきまでにこにこ顔で「セーラさん」とよんでいた人とは思えないほどおそろしい顔で、ミンチン先生はセーラをにらみました。
「さあ、へやにいきなさい。」
ほかの先生たちが、ふしぎそうな顔をしている生徒たちのせなかをおして、へやの外へつれていきました。
パーティーの会場には、セーラとミンチン先生だけがのこりました。ミンチン先生はにくらしそうにセーラをにらみつけました。
「……なにか……あったんでしょうか……」
おそるおそるできいてみたセーラに、ミンチン先生は、はきすてるようにいいました。

「おまえのおとうさんがしんだんだよ。ダイヤモンドの山をほるしごとにしっぱいして、一文なしでね。」

さっきミンチン先生がよばれて出ていったのは、そのことを知らされるためだったのです。おとうさんのべんごしという人が知らせにきたのです。

セーラのおとうさんは、ダイヤモンドの山をほるしごとにざいさんをぜんぶつぎこんでしまっていたのです。

しかも、ダイヤモンドが出ないうちに、いっしょにしごとをしていた友だちが、にげてしまったのです。

おとうさんは、ひどいショックとつかれでマラリアというびょうきにかかってしんでしまったのでした。

それにしても、ミンチン先生は、なぜこんなにおこっているのでしょう。それは、セーラのためにたくさんのお金をたてかえていたからです。きょうのたんじょうパーティーのひようもミンチン先生が出したものです。

とってもけちなミンチン先生も、セーラのおとうさんが一文なしになるなんて思いもよらなかったので、どんどん自分のお金をたてかえていたのです。おとうさんはいつも、たてかえて

もらったいじょうのお金をミンチン先生におくっていましたから。
「おまえのおとうさんがしんだといっているんだよ！」
ミンチン先生は、さらに声をはりあげました。セーラがあまりおちついているので、自分のことばが通じてないかと思ったのです。
セーラは青ざめた顔で、じっと立ちつくしていました。そのひとみが、きらりと光ってミンチン先生をみつめます。
「なんとかいったらどうなの。セーラ・クルーのおとうさんは……」
そのとき、ドアのむこうでわあっとなきだす声がしました。ミンチン先生がおどろいてドアをあけます。そこにうずくまってないていたのはベッキーでした。
「こんなところで、立ち聞きしていたんだね。」
ミンチン先生は、いまにもつかみかかりそうないきおいで、ベッキーにせまりました。
「もうしわけございません。セーラさまが、あまりにおかわいそうだったものですから……」
「セーラに『さま』なんかつけるんじゃないよ。」
そのとき、ミンチン先生のわきを白いかげが走りぬけました。セーラでした。
「どこへいくんです。セーラ」

「おじょうさま。」

だれのよびかけも聞こうともしないで、セーラは走りました。

（パパがおなくなりになった……あたしのパパがおなくなりになった……）

むねのなかでさけびながら、セーラはくるったように走りつづけるのでした。

7　やねうらの王女さま

あれからどこをどう走ったのか、セーラはぜんぜんおぼえていません。

気がついたときは自分のへやのなかをぐるぐると歩きまわっていました。

「パパがおなくなりになった……パパがおなくなりになった……」

とつぶやきながら。

でも、いくら自分にいいきかせてもしんじられないのです。

(うそよ。うそなんだわ……なかないわ。なくもんですか……)

セーラは、ないたら、おとうさんがしんだことをみとめるような気がして、ひっしでなかないようにしました。

ドアがらんぼうにノックされました。

「ドアをあけなさい。セーラ。」

ミンチン先生の声です。

「だれにも……会いたくありません……」

セーラはさけびました。

「いつまで王女さまみたいなことをいってるの。もうこのへやはおまえのへやじゃないんだよ。」

（わたしのへやじゃない……）

ぼうぜんとしているセーラの前に、べつのかぎをつかってドアをあけたミンチン先生がはいってきました。

「さあ、このなかでいちばんそまつなふくをきて、出ていくんだよ。」

出ていけといわれても、セーラにはたよりになるようなしんせきはありません。

「ミンチン先生……」

「さあ、早くおし。今夜からおまえはやねうらにねるんだよ。」

とてもけちなミンチン先生は、セーラをすぐおい出そうとはしませんでした。セーラをこきつかって、たてかえたお金をとりかえそうと考えたのです。

「ここにいていいんですか。わたし。」

「そのかわり、いっしょうけんめいはたらくんだよ。小さい生徒のおさらいをしたり、だいどころのてつだいをしたり。」

「はい！」
セーラは力強くへんじをすると、てきぱきときがえにかかりました。
（いったいこの子はどういう子なんだろうね……）
さすがのミンチン先生もそんなセーラを見て、あきれています。おとうさんがしんだことを知らせても、なみだひとつこぼしません。王女さまのようなせいかつから、きゅうにおてつだいさんになっても、おどろいたようすもみせません。
ふつうの子がこんなことになったら、おろおろとなくばかりでしょうに。ミンチン先生はだんだんいらいらしてきました。
「セーラ、わたしにおれいをいわないのかい？」
「なんのおれいでしょうか。」
「ひとりぼっちになってしまったおまえを、ここにおいてやるわたしの親切にたいしてよ。」
セーラははっきりとミンチン先生をみつめ、きっぱりといったのです。
「先生は親切ではありません。親切なもんですか。」
セーラはくるりとせをむけて、へやを出ていきました。
ミンチン先生は、くちびるをぶるぶるふるわせてセーラをみおくっていました。はげしいい

かりでことばも出なかったのです。

セーラのやねうらのへやは、ベッキーのへやのとなりでした。やねうらにのぼるには、きゅうなかいだんを二つものぼらなければなりません。ベッキーから話は聞いていましたが、やねうらにのぼるのは、はじめてです。

じっさいにきてみると、まるでべつのせかいのようでした。とても同じたてもののなかとは思えないほど、うすぐらくてよごれています。

セーラはむねをどきどきさせながら小さなドアをあけてみました。

ななめになっているてんじょう。はげおちたかべ。みるからにかたそうなベッド。あかりとりのガラスまどは、すすけて空もろくに見えません。

(やっぱり、パパはおなくなりになったんだわ……)

やねうらのそまつなへやに立って、セーラははじめて、おとうさんのしんだことをしんじる気もちになりました。セーラは足のとれかかった小さないすにすわりました。からだじゅうの力がどっとぬけていくのが、自分でもわかりました。

(ロンドンでわたしをまっていたおそろしいことというのは、パパがしぬことだったのね……)

セーラがおとうさんのそばについていたら、おとうさんはしぬようなことはなかったかもしれません。
おとうさんと馬車にのって、きりのなかをぐるぐると走りまわったのが、さいごの思い出になってしまいました。
（あのとき、もうひとまわりすればよかったわ……）
セーラはじっと目をとじて、おとうさんのたくましいうでにだかれたときのあたたかさを思い出していました。たまっていたなみだが、いっぺんにあふれそうになったとき、ドアをそっとノックする音がしました。
セーラがじっとしていると、ドアが少しずつひらいてベッキーの顔がのぞきました。
「……はいってよろしいでしょうか。おじょうさま。」
ベッキーの顔はなみだでぐしょぐしょでした。あれからずっとないていたようです。
なみだまみれのベッキーの顔を見たセーラは、いままでこらえていたかなしみが、いっぺんにふき出したように、なきだしてしまいました。
「おじょうさま……」
「ベッキー……いつかいったでしょう。わたしたちは、ふつうの女の子どうしだって……もう、

わたしは王女さまでもなんでもないのよ。」
　セーラはベッキーの手をとると、なきながらいいました。ベッキーはセーラの前にひざまずくと、なみだだらけの顔でいいました。
「いいえ。おじょうさまは王女さまです。どんなことになっても、どこにいらしても王女さまです！」

8 セーラとアーミー

ぴゅるる……ぴゅるる……

まるで大男がすすりないているようなきみのわるい音は、やねの上のえんとつのなかをふきぬける風の音でした。

きゅうきゅう……がりがり……

かべのなかで、さわいでいるのはねずみたちです。

セーラはかたいベッドのなかでからだをちぢめました。へやじゅうがまっくらでなにも見えないせいか、まわりの音だけがよく聞こえてくるのです。

セーラがはじめてむかえるやねうらの夜です。

ゆうべのいまごろは、やわらかいベッドですやすやとねむっていたのに、なんというかわりようでしょう。

おとうさんがしんだために、セーラのまわりのせかいは、ものがたりのようにかわってしま

ったのです。それこそ、なげいたり、かなしんだりするひまもないほどのあわただしさでした。
こうしてくらがりにひっそりとよこたわっている自分が、うそのようでした。夜が明けてあたりが明るくなれば、またもとのすてきなへやにねむっている自分に気づくのではないかと思ったりしました。
セーラはぜんぜんねむれないまま、夜明けをむかえました。あかりとりのまどからの光が、へやをうっすらとうかびあがらせます。
(やっぱり、ここはやねうらなんだわ……)
朝になると、セーラはミンチン先生によばれてしょくどうにいきました。いままで自分のすわっていたせきには、ラビニアがすわっていました。
「なにをぼんやり立っているんです。小さい子のめんどうをみてやりなさい。」
「はい。」
生徒たちは、わざとセーラのほうを見ないようにしていました。セーラもだまって小さい子たちのせわをします。
しょくじがおわると、セーラは小さい子たちにフランス語を教えます。これは、セーラのしごとのうちでいちばん楽なことです。

あとはだいどころにいって、さらあらいをやらされたり、かいものにいかされたりします。
おてつだいさんたちは、おもしろがってセーラに用をいいつけました。セーラについていたおてつだいさんは、きのうのうちにやめさせられてしまいました。
セーラのみかたになるようなものをおいておくとよくないという、ミンチン先生のひとことでやめさせられてしまったのです。
だから、ベッキーとセーラがなかよくしていると知ったら、ミンチン先生はベッキーもやめさせてしまうでしょう。もっとも、ミンチン先生はベッキーを人間だとは思っていないようです。ストーブに火をつけたり、せきたんをはこぶきかいぐらいにしか考えていません。
ベッキーはいつもいつもセーラをたすけたり、かばったりしていました。夜明けになるとかならずセーラのへやにやってきて、やぶれたふくをつくろったり、ボタンをつけてくれたりします。
「おじょうさま。わたしの口のきき方がしつれいでも気にしないでくださいね。」
ある日、ベッキーはもうしわけなさそうにいいました。
「おじょうさまにていねいな口をきくとしかられるんです。」
「ベッキー。わたしはあなたと同じだといったでしょう。」

「いいえ。おじょうさまは王女さまです。これからは、心のなかだけでていねいにお話ししますから、おゆるしください。」

「なにをいうの。ベッキー。」

セーラはベッキーが同じやねうらべやにいるということだけで、どれほど心強い思いをしたかわかりません。くらがりでえんとつのすすりなきを聞いたときも、かべのむこうにもうひとりの女の子がねむっているんだと思うと、おそろしさが半分ぐらいになったのですから。

さて、おでぶさんのアーミーはどうしたでしょう。アーミーはセーラのたんじょうパーティーのつぎの日、家のようじでひと月ばかり学校を休んでいたのです。学校へもどったアーミーがセーラとふたりきりで会ったのは、学校のろうかでした。

そのとき、セーラはりょう手にいっぱいせんたくものをかかえていました。さいしょ、アーミーは気がつきませんでした。もともとやせっぽちのセーラはさらにやせて、きていたようふくも、むかしのセーラのすがたからは思いもよらないそまつなものでした。

「……あなた、セーラ？」

すれちがうとき、アーミーはおどおどとたずねました。

「ええ。」

セーラはうなずきながらひとりでに顔が赤くなるのをかんじました。
「あの……お元気？」
アーミーは、こういうときにどんなことをいえばいいのかわからないで、やっとそれだけいいました。
「あなたは？」
「あたし？　とっても元気だけど……あの……」
アーミーはいよいよなにをいっていいかこんがらかってしまいました。頭のなかでむちゅうで、いいことばをさがしました。
「あの……いま、ふしあわせ？」
「アーミー、わたしがしあわせだとでも思ってるの。」
セーラはあらあらしくいうと、いそぎ足でいってしまいました。
（アーミーもラビニアやジェッシーとおんなじだわ……）
いつものセーラだったら、こんなにはらをたてなかったでしょう。だれよりもアーミーのせいかくを知っているのはセーラです。おちついて考えれば、アーミーがいやがらせで「ふしあわせ？」と聞いたのではないことがわかったはずです。

その日は朝からつぎつぎとようじをいいつけられて、セーラはいらいらしていたのです。アーミーもとんでもないことをいってしまったことに気づいていました。

(あたしって、どうしてこんなにまぬけなの……)

アーミーはべそをかいていました。

それからもセーラとアーミーは、ときどき、ろうかやかいだんで会うことがありました。アーミーはセーラと会うたびに、あやまろうとしました。でも、アーミーにはうまくあやまれるじしんがありません。あやまるつもりがもっとひどいことをいってしまって、セーラの心をきずつけてしまいそうな気がしました。

けっきょく、アーミーはセーラと会ってもなにもいえずにうつむくだけになってしまいます。それがセーラには、アーミーが自分をさけているように見えるのです。

(いいわ。アーミーがわたしと口をききたくないのなら会わないようにすれば……)

セーラはアーミーと顔を合わせないようにしました。こうして、セーラとアーミーは同じたてものにいながら、まったく会うことがなくなってしまったのです。

アーミーはセーラと知りあう前のアーミーにもどってしまいました。いつもへまばかりやって先生にしかられて、めそめそないている気の弱い女の子になってしまったのです。

セーラのほうは、しごとにおわれてアーミーのことをしんぱいするどころではありませんでした。頭のよいセーラはどんなようじをやらせてもちゃんとやります。おかげでみんなが、つぎつぎとセーラにようじをいいつけるのでした。

一日のしごとがおわって、やねうらへつづくきゅうなかいだんをのぼるのがつらいほど、セーラははたらかされていたのです。

「あかりがついてるわ。」

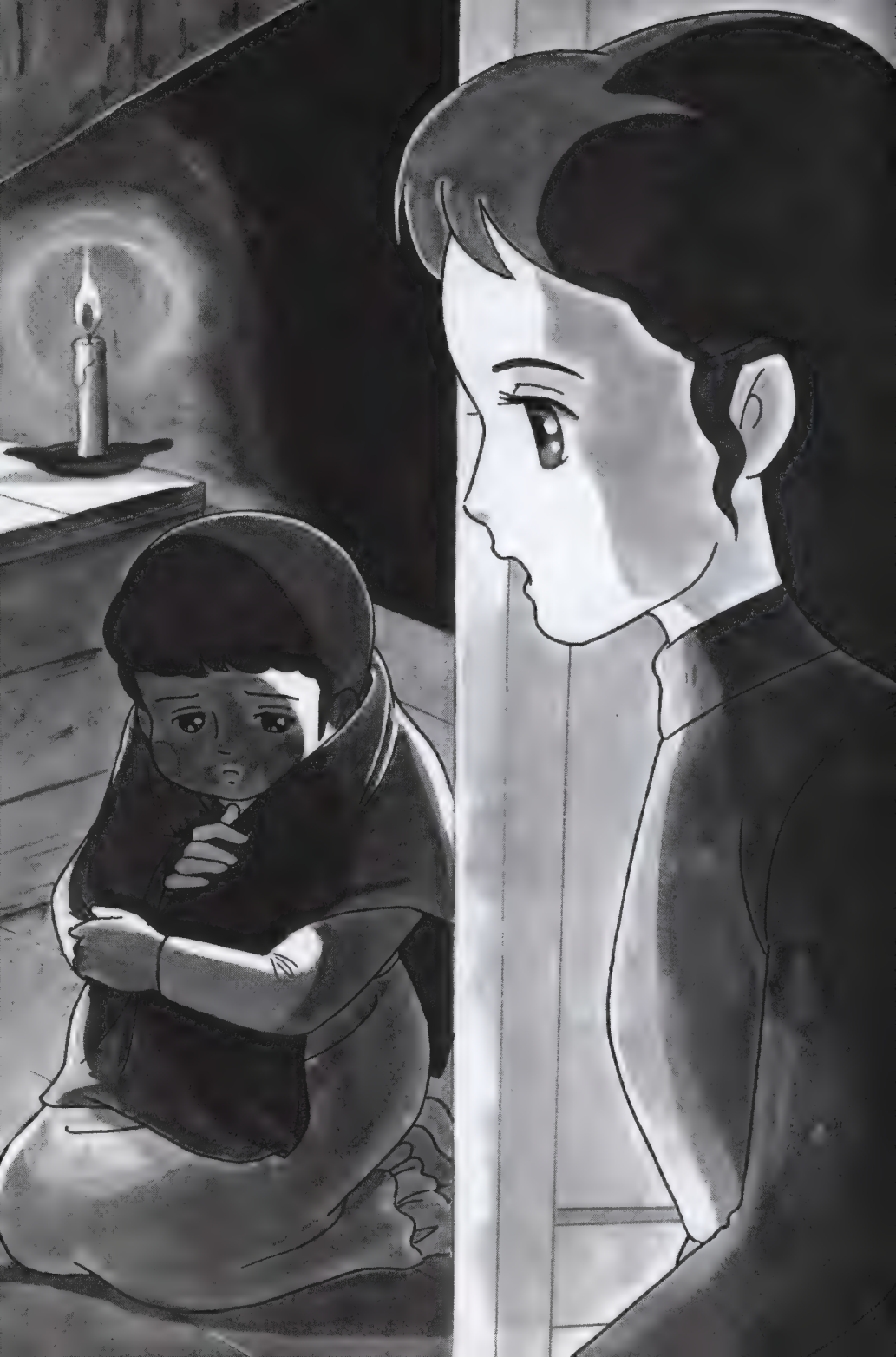
やっとしごとがすんで、自分のへやにはいろうとしたセーラは、ドアの下からろうそくのあかりがもれているのに気がついたのです。そっとドアをあけると、へやのまんなかで大きなろうそくのほのおがゆれています。セーラがいつもつかっているほそいろうそくではありません。

へやのすみに、赤いショールにくるまった女の子が、ひっそりとこしをおろしていました。見おぼえのある広いせなかです。

「アーミー……どうして、こんなところへ……」

アーミーはよろめくように立ちあがると、セーラの前へやってきました。なきながらまっていたらしくて目はまっかです。

「アーミー、ミンチン先生にみつかったらたいへんなことになるのよ。」

「かまわないわ。ねえ、セーラ、どうしてあたしがきらいになったの。」
「アーミー。それでわざわざここへきたの。」
「ねえ、おねがい。どうして、あたしがきらいになったか……。」
「わたしはいまだって、あなたがすきよ……。」
「だって。」
「わたしは、いろいろなことがきゅうにかわってしまったでしょう。だから、アーミーもかわったんだとかってに思いこんでいたの。」
「かわったのは、あなたのほうよ！」
アーミーはなみだ声でさけびました。
たしかにそうかもしれません。むかしのセーラなら、もっとあいての気もちをわかってやれたはずです。
「ごめんなさい。アーミー。」
「セーラ。あたし、もうがまんができなかったの。」
「アーミー……。」
セーラとアーミーは、いきなりだきあいました。アーミーはセーラのむねをゆさぶるように

していました。
「あなたはあたしがいなくてもくらしていけるんでしょう。でもあたしは、あなたがいなくては、とても生きていかれないわ。」
今夜もアーミーは、ベッドのなかでセーラのことを考えていました。考えているうちに、がまんできなくなって、このやねうらにのぼってきてしまったのです。
ようやく気もちのおちついたアーミーは、あらためてへやのなかを見まわしました。
「セーラ、こんなところにすんでいられる?」
「ええ。こんなところじゃないつもりになればね。」
「セーラの『つもり』を聞くのはひさしぶりね。」
アーミーはうれしそうに白いはを見せました。
セーラもしごとのつかれをわすれて、ひさしぶりにくうそうを楽しむのでした。
「ここは、ろうやよ。」
「ろうや⁉」
アーミーはびっくりしてセーラをみつめました。セーラは話しつづけます。
「一七九二年、フランスかくめいのとき……」

「せんそうね。」
「そうよ。そのとき、フランスのルイ十六せいのおきさきは、とらえられてこういうへやにとじこめられたのよ。」
「聞いたことがあるわ。マリー……えーと。」
「マリーアントワネットおきさきよ。」
「おきさきさまがとじこめられるんなら、セーラがとじこめられてもおかしくないわね。」
「そうよ。いつかきっとせいぎのみかたがわたしをたすけにきてくれるわ。」
「どこからたすけにくるの。」
「あのまどからよ。」
セーラは立ちあがって、となりの家のやねうらべやをゆびさしました。
「でも、あの家はだれもすんでないんでしょ。」
アーミーのいうとおり、学校のとなりの大きな家はずっと空き家でした。
「じつは、おとなりにはすばらしい人がすんでるのよ。」
「ほんと?」
「ええ、だれにもあやしまれないように、わたしをたすけるチャンスをねらっているのよ。」

もちろん、みんなセーラのつくり話です。でも、アーミーには、となりの家のやねうらべやのまどが、いまにもひらきそうに思えてくるのでした。

むちゅうで話しているうちに、セーラもアーミーもここがやねうらべやだということをすっかりわすれていました。いちばんいいへやのやわらかいソファにこしかけているような気がしてくるのでした。

9　セーラとロッティー

「ねえ、セーラ。あなた、ほんとうにびんぼうになっちゃったの？」

セーラが小さい子たちの教室でフランス語を教えているとき、ロッティーがいきなり聞きました。

小さなロッティーには、セーラが「王女さま」から、「おてつだいの子」になってしまったことがさっぱりわからないのです。

「こじきみたいになったって、本当なの？」

ロッティーは目になみだをいっぱいためています。いまにもなきだしそうです。

「こじきにはすむところがないでしょう。わたしには、ちゃんとしたおへやがあるのよ。」

セーラはロッティーをかなしませないように明るくいいました。

「セーラのおへやはどこなの。」

じつはロッティーは、セーラのお話を聞こうとへやにいったことがあるのです。いままでセ

ーラのいたへやは、すっかりもようがえされて、ぜんぜん知らない子がいたのです。
「ねえ、どこなの。おへやを教えて。」
「ロッティー、いまはおべんきょうちゅうでしょ。」
こんなところをミンチン先生にみつかったら大目玉をくうにきまっています。
それでもロッティーはあきらめるような子どもではありません。セーラがいいたくないのなら、ほかの子に聞こうとしました。
そして、ついにセーラのやねうらべやをさがしてしまったのです。
ロッティーはこっそりと自分のへやをぬけ出すと、やねうらにむかいました。くらくてせまいろうかを通りぬけて、きゅうなかいだんを、はあはあいいながらのぼりました。足もとがたよりなくて、いまにもふみはずしそうです。外はまだ明るいというのに、ここはまっくらなのです。
まるで、ちきゅうのうらがわにきてしまったようなかんじがして、ロッティーは心ぼそくなりました。
やっとかいだんをのぼりつめるとふたつのドアが目の前にありました。
りょうほうのドアをあけて、どちらにもだれもいなかったら、ロッティーはこわくなってな

きだしてしまったでしょう。
「セーラ……あたしのママ。」
さいしょのドアをあけたロッティーは大声をあげました。だいすきなセーラがあかりとりのまどからおもてをながめていたのです。
びっくりしたのはセーラです。
まさか小さいロッティーがひとりでやねうらへくるとは思いませんでした。セーラはあわててロッティーの前へいくと、いいました。
「しずかにしてね。ミンチン先生にみつかったらしかられるわ。」
ロッティーは、こっくりとうなずくと、はじめてみるやねうらべやをふしぎそうに見まわしました。
「いいおへやだわ。」
ロッティーはにっこりとセーラを見あげます。
「いいおへや？　ここが。」
「うん。だって、セーラママがいるんだもん。」
ロッティーはあまえるようにセーラのほそいうでにほおをよせました。ロッティーにとって

すばらしいへやとは、セーラがいるへやのことでした。てんじょうがななめだろうが、かべがおちかけていようが、かんけいないのです。

「そうよ。ここはすばらしいおへやよ。」

ロッティーに話を合わせようとしたのではありません。近ごろは、セーラはだんだんとこのやねうらべやが気にいってきたのです。あかりとりのまどから見えるけしきは、まったく新しいせかいがひらけたようでした。

「どういうふうにすばらしいの。」

「ごらんなさい。ロッティー。」

セーラはロッティーをだきあげてテーブルの上にすわらせてやりました。

「ここからは下で見えないものがいっぱい見えるのよ……ほら！　えんとつをこんな近くで見たことがある？　すずめの目ってかわいいでしょう。」

あかりとりのまどからは、やねの上であそぶすずめが、すぐ目の前に見えるのです。ロッティーは、はじめて見るやねうらからのけしきに、すっかりこうふんしていました。

「あたし、おかしもってるわ。」

ロッティーはポケットからたべかけのビスケットをとり出します。

「あげてみましょうか。」
セーラはそのビスケットを小さくわると、やねのすずめたちになげてやりました。すずめたちは、おどろいてとびあがりました。
「にげちゃったわ。」
「だいじょうぶ。すぐもどってくるわ。」
セーラはえんとつの上の二わのすずめをゆびさしました。二わのすずめはさえずりながら、やねの上のビスケットをしきりに見ています。
「すずめのきょうだいよ、きっと。」
「なにをしゃべっているのかしら。」
セーラはおもしろいことを思いつきました。
すずめのうごきに合わせて、せりふをしゃべるのです。セーラは、いきなりつくり声でしゃべりだしました。
『ねえ、にいちゃん、あのビスケット、おいしそうだよ、チュンチュン。』
『まてまて。もう少しようすを見るんだ。チュン。』
セーラが気でもちがったのではないかとびっくりしたロッティーも、すぐにわかりました。

セーラのしゃべるせりふと、すずめのうごきがぴったりだったからです。
『ねえ、にいちゃん、食べていいでしょう、チュン。』
『うん。わなではなさそうだな。でも用心しろよ。チュン。』
『うん、チュン、チュン。』
二わのすずめは、えんとつからやねの上のビスケットの近くへまいおりました。小さいほうのすずめが、くちばしでビスケットをつつきました。
『おいしいよ。にいちゃん。チュンチュン。』
『どれどれ。なるほど、うまい。チュンチュン、チュン。』
『あそこからのぞいている小さい女の子がくれたんだよ、チュン。』
小さいほうのすずめが、ちらりとロッティーのほうを見たのです。ロッティーは本当にすずめがしゃべっているような気がして、てれくさそうにりょう手でほおをおさえました。
「あら、いやだ……」
セーラは、すっかりすずめになりきって、せりふをしゃべります。
『ねえ、にいちゃん、ぼくたちだけじゃ食べきれないね。チュン。』
『みんなをよんでやるか。おーい。ビスケットを食べないか。チュンチュン。』

するとどうでしょう。十ぱいじょうのすずめが、音をたててまいおりてきたのです。
「うわあ……」
ロッティーはかん声をあげると、むちゅうで手をたたきました。こんなすばらしいおしばいを見たのは、はじめてでした。
セーラはすずめたちのうごきをちゅういぶかく見ながら、せりふをしゃべっただけなのですが、ロッティーには、セーラがすずめたちをじゆうにあやつっているように見えました。
「ねえ、セーラ、ここへとまっていってていいでしょう。」
「とんでもないわ。」
「いや、とまってく!」
ロッティーはテーブルからとびおりると、セーラにしがみつきました。
『ロッティーちゃん、ママをこまらせてはだめだよ。チュン。』
セーラはすずめの声でいいました。ちょうどえんとつの上で、一わのすずめがこっちを見ていたのです。
あんまりぴったりとタイミングがあったので、ロッティーはだだをこねていたのもわすれてふき出してしまいました。

セーラも声をあげてわらいました。声を出してわらったなんて、何日ぶりのことでしょう。
「さあ、ロッティー、ママがとちゅうまでおくってあげるわ。」
ロッティーはすなおにうなずきました。
あかりとりのまどガラスが夕日をあびて、まっかにかがやいています。
ロッティーには、それが色とりどりにかがやく教会のステンドグラスのように見えました。

10　天国のパパへ

天国にいる人にむかって、お元気ですかって書くのはへんかしら。でも、わたしはぜったいにとどかない手紙でも書いてみたいの。

やっと近ごろ、少しおちつきました。へやはそまつなやねうらだけど、わたしをすいてくれるお友だちは、前と同じよ。

アーミー。ロッティー。ベッキー。みんな前のようにわたしのへやへお話を聞きにきてくれます。ざんねんなのはアーミーとロッティーが前のようにたびたびこられないことです。ふたりが先生や友だちにみつからないよう、やねうらべやまでくるのはたいへんなぼうけんなのです。

そのかわり、四番目のお友だちができました。名前はメルキセデク。ひげをはやしたしんしよ。おくさんも子どももいるの。メルキセデクもわたしと同じやねうらずまいよ。

わたしとベッキーのへやのあいだのかべのなかにすんでるの。つくり話なんかじゃないわ。

だって、メルキセデクはねずみなんですもの。
ロッティーがはじめてわたしのへやにきた夜、うとうとしていると足もとでごそごそという音がしたの。見ると大きなねずみが、ロッティーがおとしていったビスケットのくずを食べているのよ。わたしはびっくりして声をあげそうになったわ。ねずみもびっくりしたらしくて、わたしの顔を見あげました。
わたしとねずみは、しばらくにらめっこをしていました。本当は、わたしはこわくてうごけなかったんだけど。それでもゆうきを出していってみたの。
「食べてもいいわよ。ねずみさん。」
ねずみは、わたしがいじめないということがわかったらしくて、ビスケットの大きなかけらをくわえました。
「どうぞ、お食べなさい。」
ねずみはビスケットをくわえて、かべのあなのなかにはいってしまいました。すぐかべのなかでねずみのさわぐ声がしました。
「子どもたちにもっていってあげたのね。」
わたしは子どもたちにビスケットをわけてやっているおとうさんねずみのすがたを思いうか

べて、楽しくなりました。

こわかったねずみが人間のように思えました。それから大きなねずみはちょくちょく、わたしの前に出てくるようになりました。

「あなたに名前をつけてあげないといけないわね。」

わたしはその大ねずみにメルキセデクという名前をつけたの。どうして、そんないいにくい名前をつけたかって？　なんとなくメルキセデクっていう顔をしてるの。

ミンチン先生だって、わたしこそミンチンでございという顔をしてるし、ロッティーだってみるからにロッティーちゃんっていうかんじだわ。

パパ……

きょうパパに手紙を書こうとしたのは、本当はメルキセデクをしょうかいするためじゃないの。パパが生きていらっしゃるとき、わたしはパパに出す手紙に、つらいことやかなしいことは一字も書きませんでした。

でも、パパはもう天国へいってしまったんですもの。書いてもいいわよね。

きっとわたしはもうすぐパパのところへいくわ。

きょうも雨のなかを四回もおつかいに出されたの。いっぺんにようじをいいつけてくれない

から、わたしは一日じゅう町を歩きまわっていなければいけないんです。ようふくはつんつるてんになってしまって、さむくて、さむくて。

くつもあながあいているから雨水がどんどんはいってくるの。からだじゅうがこおりつきそうになって、おつかいから帰ると、りょうりばんが、かんかんにおこって、ごはんを食べさせてくれないの。たのんだしなものをちゃんと買ってこないっていうの。わたしは雨のなかを町じゅうのお店をさがして歩いたんだけど、みつからなかったの。

だから、きょうは夕はんは食べていません。

さむさとひもじさで、わたしはしにそうです。もうすぐパパのところへいきます。

セーラはうけとる人のいない手紙をなきながら書きつづけていました。おしまいには文字がなみだでかすんで見えなくなりました。

そのときです。かべのほうがさわがしくなりました。

「メルキセデク……」

セーラはなみだをふいて立ちあがりました。

かべのあなの前に、メルキセデクがおくさんと四ひきの子どもをつれてすわっているのでし

た。
「あなたのおくさんと子どもなのね！」
なき声はいつも聞いていましたが、すがたを見るのは、はじめてでした。
「かわいいわ……」
セーラはしゃがんで子ねずみをのぞきこもうとしました。子ねずみたちは、おどろいてあなのなかににげこもうとしました。
メルキセデクがあわてて子どもたちをとめます。この人はやさしい人だからにげなくてもいいんだよというように。
「ごめんなさい、メルキセデク。せっかくおおぜいできてくれたんだけど、今夜はなにもないのよ。」
いつも夕はんののこりを少しもってきてメルキセデクにあげるのですが、きょうはセーラがかんじんの夕はんを食べさせてもらえなかったのです。
メルキセデクは「いいんですよ。」というように、おくさんと子どもたちをながめながらなきました。
「わたしもこれだけたくさんの家ぞくをかかえてがんばっているんですから、セーラさんもが

んばってください。」

セーラには、そういうふうに聞こえたのです。

いえ、まちがいなくメルキセデクは、そういったのです。なぜならば、セーラが書きかけのびんせんをまるめてみせると、メルキセデクはあんしんしたように、かべのあなのなかへ帰ってしまったのですから。

さいごにおくさんねずみが、あなのなかからちょこんと顔を出しました。

「しゅじんがいつもおせわになっています。」

というように。

「こちらこそ……」

セーラはスカートのはしをつまんであいさつをかえしました。

11　となりのやねうら

セーラのりょう手は、いまにもちぎれそうでした。たくさんのパンやにくややさいをりょうほうの手にさげておつかいから帰ってきたのです。

うまくバランスをとって歩かないと、よろよろと、そのままたおれてしまいそうです。

やっとの思いで学校のたてものが見えるところにさしかかったときです。

学校のとなりの家のげんかんやまどがひらいていて、にづくりをしたはこや、かぐがいっぱいつんであるのが目にはいりました。

「どなたかがこしていらしたんだわ。」

とっさにセーラは、いつかアーミーに話したせいぎのみかたの話を思いうかべました。

目の前がきゅうに明るくなったような気がしました。

もちろん、お話のようにうまいぐあいにいきっこありません。でも、長い間とじたままだったとなりのやねうらべやにどんな人がはいるのか、そうぞうしただけで、セーラは心がはずん

でくるのでした。
とはいっても、やねうらべやにすむのは、おてつだいさんかめしつかいでしょう。
(お友だちになれるような人だといいわ……)
そこへ、にもつをいっぱいつんだ馬車がつきました。馬車につんであるテーブルやいすを見たセーラは、あっとおどろきました。
「インドの方だわ。」
そのテーブルやいすは、セーラがインドにいるときにつかっていた、こまかいさいくのしてあるごうかなものとそっくりです。
セーラのむねはなつかしさでいっぱいになりました。それから夕方まで、にもつをつんだ馬車が何台もつきました。
いつもはつらいおつかいも、セーラははりきって何回もでかけました。
となりの前を通ったとき、新しくこしてきた「インドの人」に会えるかもしれないと思ったからです。
しかし、ついにとなりの人の顔を見ることはできませんでした。となりの人は、その夜だれにも見られないように、ひっそりと家のなかへはいったのです。

そして、二しゅうかんたっても、三しゅうかんたってもおもてに顔を出しませんでした。

セーラはがっかりです。「インドの人」ならきっとお友だちになれると楽しみにしていたのです。

おまけにとなりのやねうらべやのまどは、しまったままです。きっとものおきにでもなっているのかもしれません。セーラはかわいいインド人のおてつだいさんがすむようになるのではないかとそうぞうしていたのです。

しばらくして、すばらしい夕やけの日がありました。空いちめんがまっかにもえて、イギリスではめったに見られない夕やけです。

セーラはいそいでやねうらべやにのぼりました。なつかしいインドの夕やけを思い出したのです。白い雲までがまっかにそまってしまう夕やけ空をながめながら、セーラはよくおとうさんにものがたりをつくって聞かせました。

生きもののようにくるくると色がかわる雲や空をしゅじんこうにしてお話を作るのです。

おとうさんはいつも楽しそうにセーラの話を聞いていました。

「インドの夕やけだわ！」

あかりとりのまどから空を見たセーラはさけびました。まるで雲にのって、インドへとんで

きたようでした。
「すばらしい……」
どこかで男の人の声がしました。
「あっ！」
となりのやねうらべやのまどがあいているのです。頭にターバンをまいたインド人が小さなさるをだいて夕やけ空をながめていました。セーラと同じように、あまりにすばらしい夕やけをもっとよく見ようとやねうらべやにのぼってきたにちがいありません。
「こんにちは……」
セーラはインドのことばであいさつしました。ターバンのインド人は、びっくりしてあたりを見まわしました。空の上から自分の国のことばが聞こえてきたのですから。
インド人は、にっこりしながらこっちを見ているセーラをみつけました。そのとき、インド人のうでにだかれていた小さなさるが、そのうでからするりとぬけ出しました。
さるは目にもとまらないはやさでやねを走りぬけると、セーラのへやにとびこんできました。キャッキャッとなきながら、セーラのかたにとびのったのです。
セーラがつかまえようとすると、ぱっととびおりて、からかうようにへやのなかをにげまわ

ります。
セーラはこまってインド人のほうを見ます。
「どうしたらいいでしょう。」
セーラはインドのことばでとなりのやねうらのまどの人に話しかけました。
「おそれいります。おじょうさま。もし、よろしければ、やねをわたってそちらへまいり、そのいたずら小ざるをつかまえたいとぞんじますが。」
インド人はていねいにいいました。
「やねをわたったりして、あぶなくありませんか。」
「なんでもないことですよ。」
「では、どうぞ。」
インド人はさるにまけないほどみがるにやねをつたって歩いてきます。
「では、しつれいします。」
インド人はひらりとセーラのへやにはいると、まずまどをしめました。入り口をふさがれては、小ざるもにげばがありません。
「このいたずらざるめ。」

インド人は、長い手をひょいとのばして小ざるをつかまえてしまいました。
「どうもおさわがせしてもうしわけございません。うっかり、このさるをにがしたりしたら、ごしゅじんさまが、がっかりなさるところでした。」
インド人はラム・ダスといって、となりのしゅじんについてインドからやってきためしつかいでした。
「ごしゅじんはインドの方ですの。」
「いいえ。ごしゅじんはごびょうきでございまして、この小ざるは、ごしゅじんのなぐさめやくでございます。」
セーラはやっと、となりのしゅじんが顔を見せないわけがわかりました。
「では、わたくしはこれでしつれいいたします。」
ラム・ダスはていねいにおじぎをして、またやねづたいに帰っていきました。
「ごしゅじんのびょうきが早くよくなりますように。」
「ありがとうございます。」
ラム・ダスは、まっ白いはを見せて、もういちどおじぎをしました。
ラム・ダスはふしぎでたまりませんでした。

あんなにきちんとした口のきき方をする女の子が、なぜあんなそまつなようふくをきて、あんなひどいへやにいるのか。

どう見ても、あのようふくやへやは、セーラににあわないような気がするのです。

12　セーラがないて

きびしい冬がやってきました。
やねうらべやにはてんじょうがありません。
てんじょうというのはやねのことなのですから。だからあつさもさむさもじかにへやにしのびこんでくるのです。
ロンドンの冬は、きりが出なくても、四時になるとくらくなってしまいます。そして、たちまちひえこんでくるのです。セーラもベッキーもベッドにはいっても、さむくてさむくてねつくことができません。それでなくても、ふたりとも昼間のおつかいやせきたんはこびで、からだじゅうがひえきっているのです。
（ここはだんろの火がひとばんじゅうもえているあたたかいへや……わたしは、ふんわりしたふとんにくるまって……）
セーラはさむさにふるえながら、そういう「つもり」になろうとしていました。でも、むり

です。「つもり」になることで、まずしい心をゆたかにすることはできますが、さむさをあたたかさにかえることはできないのでした。

（そうだわ……）

セーラはすばらしいことを思いつきました。

ベッドからぬけ出すと、かべをとんとんとつづけて四つたたきました。それは、となりのベッキーとれんらくするときの合図です。

《こちらへいらっしゃい、ベッキー。》

すぐむこうからかべが五回たたかれました。

《すぐいきます。》

きっとさむさでねむれないでいたのでしょう。

「ねえ、ベッキー、おふとんを二ばいにするほうほうを思いついたの。」

はいってきたベッキーは、きょとんとしてセーラをみつめます。だってベッキーは、もう一まいふとんがあれば、どれほどあたたかいだろうと考えていたところをセーラによばれたのです。

「そんなまほうみたいなことができるんでございますか。」

「かんたんよ。あなたがふとんをもってきて、ここでいっしょにねればいいのよ。だきあってねむりましょう。」
「でも、おじょうさまとわたしが……」
「わたしはあなたと同じさむがりやの女の子よ。」
「はい！」
ベッキーはとんで帰って自分のふとんをはこんできました。たしかにふとんはばいになってあたたかくなりました。
セーラとベッキーはおたがいのからだをあたためあうようにねむりました。
その夜、ベッキーはゆめを見ました。おかあさんのむねにだかれて、すやすやとねむっているゆめです。生まれるとすぐすてられてしまったベッキーは、おかあさんの顔を知りません。それなのに、おかあさんの顔がはっきりと見えたのです。
それからというものは、セーラとベッキーは同じへやでだきあってねむりました。かんたんな思いつきで夜のさむさはどうにかがまんできました。
しかし、昼間のしごとはいよいよつらくなっていました。ほかのおてつだいやコックたちは、セーラにつらくあたるとミンチン先生がまんぞくそうな顔をするのに気づいたのです。

だれもがミンチン先生に気にいられようとセーラをこきつかうのでした。自分たちが楽をしたうえに、ミンチン先生に気にいられるのですからうれしくてたまりません。

セーラは朝からばんまで、こまねずみのようにはたらかされるのでした。そして、ちょっとでもだれかがきげんがわるいと、すぐに、しょくじをとりあげられてしまうのです。

三食をちゃんと食べられる日は数えるほどしかありません。夕はんの時間にいなかったというりゆうで、食べさせてもらえないこともありました。コックのおつかいで町へいって帰りがおそくなったのです。自分でようじをいいつけておきながらコックはいいました。

「いまごろ帰って、食べるものがあるはずないだろう。」

その日は、セーラはお昼も食べさせてもらえなかったのです。やねうらのかいだんをのぼっているうちに、めまいがしてきました。かいだんは、いつもよりずっときゅうに見えて、ふだんのなんばいも長くかんじられました。少しのぼっては、しばらく休むことをくりかえしながら、ひっしでかいだんをのぼりつめました。

ドアのすきまから、ろうそくのあかりがもれています。

「アーミーだわ。」

アーミーはあたたかそうな赤いショールにくるまって、ベッドの上にきちんとすわっていま

した。アーミーはメルキセデクがこわいのです。

「今夜きてくれるとは思わなかったわ、アーミー。」

「しんしつを見まわる先生がお休みなの。だから、きょうは朝までいてもへいきなのよ。」

そういいながら、アーミーはセーラの顔がまっさおなのに気がつきました。

「セーラ、とってもつかれているようよ。」

「ええ……ちょっと。」

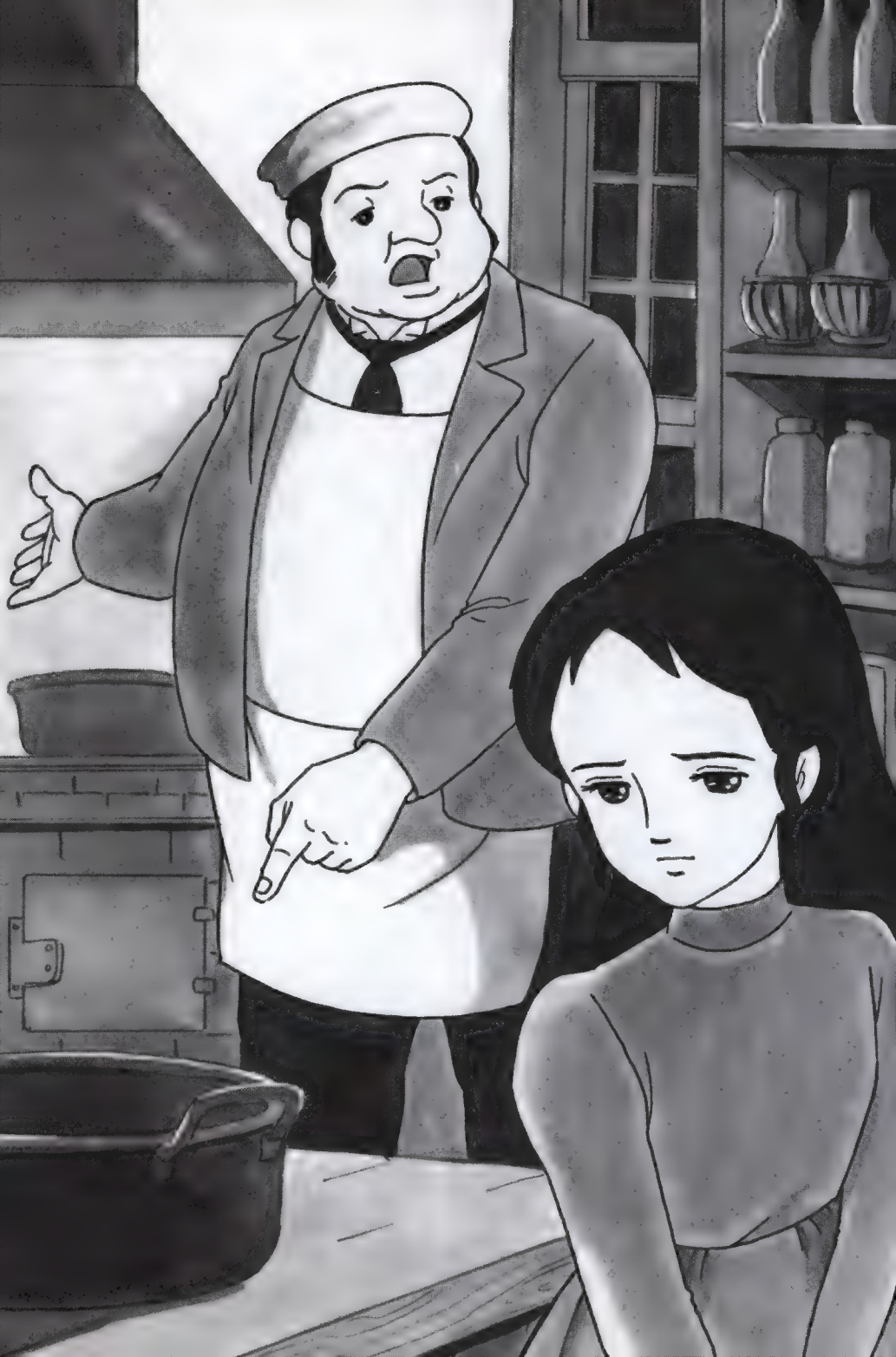
かべのあなからメルキセデクが、ちょこちょことすがたをあらわしました。アーミーはひめいこそあげませんが、ベッドの上でからだをかたくしています。なんど会っても、アーミーはメルキセデクがきみわるいのです。

「ごめんなさいメルキセデク。今夜はなんにも食べるものがないのよ。」

セーラがそういうと、メルキセデクはとぼとぼとあなのなかへはいっていきました。

「おくさんにあやまっておいてね。」

そのときです。下のほうでミンチン先生のどなり声がしました。そして、ベッキーのなき声も。

「ミンチン先生がくるわ。」

アーミーはきゅうにおどおどしだしました。セーラはろうそくをふきけして、じっとします。

「だいじょうぶよ。ミンチン先生はめったにここへはこないから。」

しずかにしていると、下からミンチン先生の声がよくひびいてきます。

「にくまんじゅうをぬすんだのは、おまえじゃないっていうんだね！」

「あたしじゃありません。おなかはすいてましたけど、とったりしません。」

ベッキーがなきながらうったえています。

どうやらミンチン先生は、ベッキーをおいまわしているようです。

「このはじ知らずの大どろぼう！」

ぴしゃっという音がしました。ミンチン先生がベッキーをつかまえて、ほっぺたをなぐったのです。

「こんどこんなことをしたらおい出すからね。」

ミンチン先生はあらあらしい足音をたてていってしまったようです。ベッキーがなきながらかいだんをのぼってきます。

となりのへやのドアがばたんとしまったかと思うと、ベッキーのはげしいなき声がしました。

「あたしじゃない！　本当にとる気なら、ぜんぶとったわ！　おなかがぺこぺこなんだもの。」

セーラはまっくらなへやに立って、くやしくてくやしくて、からだをふるわせていました。
もう少しミンチン先生がベッキーをいじめていたら、がまんできずにとび出していったでしょう。
「なんてひどい人なの！　なんていう人なの！」
セーラはこらえきれなくなって、りょう手で顔をおおうと声をあげてなきだしました。
からだじゅうのくやしさをいっぺんにしぼり出すようなはげしいなきかたでした。
（セーラがないている……めったになみだされ見せなかったまけずぎらいのセーラが……）
アーミーはしんじられないように、セーラをみつめていました。アーミーはあまりよくない頭でけんめいに考えていました。セーラがこんなにくやしなきするのは、ベッキーがどろぼうにされてしまったからだけではないような気がしたのです。
（もしかしたら……）
アーミーは手さぐりでマッチをさがすと、ろうそくに火をともしました。アーミーはないているセーラの顔をのぞきこみます。
（そうだわ！　そうなんだわ……）
いくら頭のよくないアーミーでもわかりました。

「セーラ……まちがいだったらごめんなさいね。あの……あなた、もしかしたら、おなかがすいてるんじゃない？」

「そうよ。」

セーラはむせびなきながらいいました。

「そうなの。あなたをとって食べてしまいたいくらい、おなかがすいているわ。ベッキーはわたしよりもっとすいているでしょうけど。」

アーミーは、いきがとまるほどおどろきました。

「どうしましょう。わたし、ちっとも気がつかなくて……」

このときほど、アーミーは自分のにぶさがかなしくなったことはありません。一週間にいちどはこのやねうらべやにきていながら、セーラがいつもおなかをすかせていたなんて考えもしなかったのです。メルキセデクにえさをやっているくらいだから、食べものにふじゆうしているなんて思いもつかなかったのです。

「いいのよ、アーミー。わたしがあなたに気がついてもらいたくないようにふるまったのだから。」

「なぜなの、セーラ。」

アーミーがセーラのような場合なら、食べものをもってきてもらうようにたのんだにちがいありません。
「あなたに食べものをもらったりしたら、こじきみたいな気がするでしょう。」
「こじきになんか見えるもんですか。ようふくは少しへんだけど、こじきのようなお顔じゃないわ。」
アーミーはむきになっていいました。アーミーは気のきいたことがいえないかわりに、おせじやうそもつけないことをセーラは知っていました。
「セーラ、ちょっとまっててね。」
アーミーは目をかがやかせて立ちあがりました。
「どこへいくの。アーミー。」
「けさ、わたしの大すきなおばさんが、おやつをおくってくれたのよ。クッキーやチョコレートやみかんや、それから赤ぶどうしゅもあったわ。」
「ああ……そんなに食べものの名前をならべないで。」
セーラは、その食べものを思いうかべただけでめまいをおこしそうでした。
「とってくるわ。わたし。」

のろまのアーミーが、こんなにはりきるのははじめてです。セーラはアーミーの手をにぎっていいました。

「ねえ、アーミー、また『つもり』をやりましょう。パーティーのつもり！」

「ろうやのなかのパーティーね。」

「そうよ。となりのろうやの女の子もよんであげましょうよ。」

セーラはかべのそばへいくと、ちょうしよくノックしました。

とんとんとんとん……

とんとんとんとんとん……

ひびくようにへんじがかえってきました。

さあ、ま夜中のパーティーのはじまり、はじまり！

13　三人だけの「つもり」

まっかなテーブルクロスの上に、さまざまな食べものがならべられました。

「さあ、りょうりは、この金のおさらでとって。」

金のおさらというのは白いハンカチでした。セーラがやねうらべやへもってきたたったひとつのトランクのそこに、ぜんぜんつかっていないハンカチが一ダースもはいっていたのでした。すっかりわすれていたのを、気もちがおちついたとたんに思いだしたのです。

「ベッキー、ナプキンをしましょう。」

とベッキーを見たセーラはびっくりしました。ベッキーは気をつけのしせいをして、目をぎゅっととじて立っているのです。つま先から足の先まで力がはいっています。

「どうしたの、ベッキー。」

「いっしょうけんめい、『つもり』になっているんです。だんだん『つもり』になってきました、おじょうさま。」

「でも、おじょうさま、つもりになるのはずいぶんと力がいるもんでございますね。」
「え、ええ、なれないとそうかもしれないわ。」
アーミーは、さっきからひっしでわらいをこらえていましたが、ついにがまんできなくなって、ふきだしてしまいました。
「ねえ、セーラ。どうせなら、ここはろうやより、おしろの大広間ということにしない。」
きょうのアーミーは、だんぜんさえているようです。セーラも大さんせいです。
「どうせ『つもり』になるんなら、おしろのほうがいいわね。」
「セーラが王女さまよ。」
「でも、これはアーミーのごちそうよ。だから王女さまはあなたよ。」
「こまるわ。わたしはこんなに太ってるし、王女さまなんか、見たこともないんですもの。」
「じゃいいわ。あなたがそう思うのなら。」
いいながらセーラは、すばらしいことを思いつきました。このへやのすみにもさびついただんろがありました。
「ここに紙くずを入れてもせば、おしろの大広間のように明るくなるわ。」

セーラはだんろのなかに紙くずを入れるとマッチで火をつけました。へやじゅうがぱっと明るくなりました

「うわあ、すてき！」

アーミーもベッキーもすっかり「つもり」になっているようです。

「うつくしいおとめたちよ、こちらへどうぞ。」

王女になったつもりのセーラは、ふたりのおとめをテーブルにあんないしました。

「どうぞこころゆくまで、お楽しみください。」

アーミーとベッキーが手をたたきました。

三人がおかしやくだものに手を出そうとしたとき、だれかがかいだんをのぼってくる足音がしました。あらあらしい足音がやねうらいっぱいにひびきわたります。

「ミンチン先生だわ！」

三人は青くなりました。

ドアがらんぼうにひらいて、けっそうをかえたミンチン先生がとびこんできました。ミンチン先生はテーブルのごちそうや、さびただんろでまだちょろちょろともえていたほのおを見ました。

「こんなことだろうと思っていたよ！　ラビニアのいうとおりだったわ。」
ラビニアがひみつをかぎつけてつげ口したのでした。たぶん、やねうらにいくアーミーのあとをつけたのでしょう。
「このはじ知らず！　夜が明けたら、さっさと出ていくんだよ。」
ミンチン先生はつかつかとベッキーの前へいくと、そのほおをぴしゃりとなぐりました。
セーラは青ざめて立ちつくしていました。
アーミーはついになきだしてしまいました。
「ベッキーをおい出さないでください。これはみんなわたしが……おばさんからのおかしやくだものを……ただ、パーティーごっこをしていただけなんです。」
なきながらいうアーミーにミンチン先生はつめたくいいました。
「アーミーが、こんなことを考え出すほど頭がいいっていうの。」
とミンチン先生はセーラをにらみつけました。
「こんなやねうらへきてまで、王女さまぶりたいのかい。」
「……。」
ミンチン先生はおびえて立ちすくんでいるベッキーをどなりつけました。

「いつまでそんなところに立っているんだ。」
ベッキーはふるえながら出ていきました。
ミンチン先生は、アーミーにいいました。
「あなたはへやにもどりなさい。あしたは一日へやから出てはいけません。今夜のことはおとうさまにほうこくしますからね。」
アーミーはなきじゃくっていました。
ミンチン先生は、セーラがじっと自分をみつめているのに気がつきました。
「まあ、なんていう顔でわたしを見ているんだ?」
「考えていたのです。」
「考えているだって?」
「はい、わたしがこんなところにいるのをパパがお知りになったら、どうおっしゃるだろうと考えておりました。」
「なんだって!?」
ミンチン先生はからだじゅうの血が頭にのぼってしまったようにおこりだしました。
「よくもそんなことを! よくも……いったいなんていう子なんだい!」

いかりくるったミンチン先生は、セーラにとびかかって、りょうほうのかたをつかんではげしくゆさぶりました。

それでもセーラは、ミンチン先生の顔をじっとみつめつづけています。

「おぼえておいで!」

ミンチン先生は、テーブルの上のごちそうをかきあつめてアーミーにもたせると、ドアをばしゃんとしめて出ていってしまいました。

おしろの大広間は、あっというまにすきま風のふきこむやねうらべやになってしまいました。金のおさらやししゅうのついたナプキンは、白いハンカチにもどってしまいました。

王女さまも、おなかをすかしたあわれな女の子になりました。つかのまの楽しいゆめは、こがらしにのって、どこかへふきとんでしまったのです。

セーラは、どっとつかれが出てベッドにたおれこみました。

(これはきれいなやわらかいベッド。ふんわりしたもうふが、やさしくわたしをつつんで……)

そんなことをそうぞうしているうちに、セーラはいつのまにかねむってしまいました。

どれくらいの時間がすぎたでしょう。

セーラは聞いたことのないもの音を聞いて目をさましました。えんとつのひゅうひゅうなる音やメルキセデクの子どもたちがさわぐ声にはなれっこになっていて、目をさますようなことはありません。やねの上を歩く足音を聞いたような気がしたのです。

目をさましたものの、セーラは目をあける気にはなれませんでした。からだじゅうがぽかぽかとあたたかいのです。まるで、だんろがもえているへやでやわらかいもうふにくるまってねむっているようでした。

(なんだ、ゆめなのね……)

ゆめならば、目をあけたり、おきあがったりしたらさめてしまうでしょう。セーラは気もちよさそうに目をとじて、ぬくぬくとしたあたたかいふんいきを楽しむことにしました。

また、かわったもの音がしました。ぱちぱちと音をたててもえているまきの音です。

(かじかしら……)

セーラは、はっとおきあがりました。せっかくのゆめがさめてしまうわと思いながら。

でも、しんぱいはいりませんでした。目をあけてもゆめはさめません。さっき紙くずをもしただんろで、まきがいせいよくもえています。火の上にはぴかぴかにみがかれたやかんがかけてあります。ゆかには、とてもきれいなじゅうたんがしいてあって、おりたたみしきのテーブル

がおいてあります。
テーブルの上には、さっきよりすごいごちそう。セーラがかけていたもうふは、やわらかくてあたたかいものにかわっています。
本だなには、新しい本がならんでいます。
(ゆめのなかで目をさましているんだわ、わたし……)
セーラは本だなの本に手をのばして、ひょうしをひらいてみました。

やねうらのおじょうさんへ
お友だちより

本のとびらにそう書いてありました。
(どなたかがわたしにくださったのかしら? するとこれはゆめじゃないのかしら……)
セーラはベッドからぬけ出すと、いすにかけてあったきぬのガウンをはおってみました。
(あたたかいわ……そうだ、これをきてベッキーのへやへいけば……)
セーラはとなりのへやをノックしました。
「ベッキー! おきて。おきてちょうだい。」
ねむそうな目でおきてきたベッキーは、セーラのすがたを見るなり、ねむけがすっとんでし

まいました。
「おじょうさま……」
みんなに「王女さま」とよばれていたころのセーラが立っていたのですから、ベッキーはおどろいてしまいました。
「早くきて！　ベッキー。」
セーラはベッキーの手を引いて自分のへやへつれていきました。
ベッキーはなにかいおうとするのですが、ことばが出てきません。
「本当なのよ！　ゆめじゃないのよ、ベッキー。」
「『つもり』にならなくてもいいんですね。おじょうさま。」
それから、セーラとベッキーはふたりだけのばんさん会をすることになりました。テーブルの上には、ゆげのたっているスープまでよういされていました。
「おじょうさま。早く食べないときえちゃうんじゃないでしょうか。」
ベッキーがしんぱいそうにたずねました。
「きえやしないわ。もし、ゆめだったら、たいてい口のなかに入れる前に、目がさめちゃうでしょ。」

「そういえば、ゆめのなかでおなかがいっぱいになったことはございません。」

ふたりはごちそうをおなかいっぱいたべました。むちゅうで食べてものこってしまいました。あたたかいへやでおなかがいっぱいになって、ふたりともねむくなってしまいました。

セーラはベッキーに新しいもうふを分けてあげました。ベッキーは、それをもって自分のへやにもどるとき、しんけんな顔でへやを見まわしました。

「なにを見てるの、ベッキー。」

「しっかりおぼえているんです。もし、あしたになってきえていても、ちゃんと思い出せるようにおぼえておくんです。……あそこにあたたかい火があって、ここにすてきなテーブル。その上にはすばらしいランプ……」

とベッキーはむねのなかにきざみつけるようにして自分のへやに帰っていったのです。

朝になってもへやのものはなにひとつきえませんでした。

14　ふたりのひみつ

「ねえ、知ってる？　セーラたちのやねうらのパーティー。」
「のろまのアーミーがごちそうをはこんだんですって。」
「ミンチン先生にみつかって、セーラは、ものすごくしかられたんですって。」
「セーラは学校からおい出されるんじゃない？」
「あら、おい出されるのはベッキーだっていう話よ。」
つぎの朝、学校じゅうがやねうらのパーティーの話でもちきりでした。生徒たちはセーラがどんな顔をしてみんなの前にあらわれるのかささやきあうのでした。
「まっさおな顔でいまにもたおれそうにしてやってくるわ。」
ラビニアがからかうようにいいました。
しかし、みんなの前にあらわれたセーラはいつもとはくらべものにならないほどすがすがしい顔をしていました。

それはそうでしょう。おいしいものをたらふく食べて、あたたかいベッドでぐっすりねむれたのですから。

「あたし、あの人を見ると、ときどきこわくなるの。」

ジェッシーがラビニアにささやきました。

「ばかね。いじをはってるだけよ。」

そういうラビニアも、心のなかでは、セーラをうすきみわるく思っていたのです。

ミンチン先生にやねうらべやのことをいいつけた人なのに、セーラはラビニアに会うなり明るい声をかけたのです。

「おはよう。」

まるでいいつけてもらってありがとうといっているようです。

そんなセーラを見てミンチン先生は、ますますはらをたてました。

「おまえは、あんなはずかしいことをしてしかられたということが、まるでわかってないようだね。」

「いいえ。おしかりをうけたことはよくわかっております。」

顔にほほえみまでうかべて、はきはきと答えるセーラを見て、ミンチン先生はますますくや

しいのです。
「きょう一日、なにも食べられないということがわかってるんだろうね。」
「はい！」
ミンチン先生は、くやしそうにセーラをにらみつけました。
そして、ほかのおてつだいやコックたちはミンチン先生のきげんをとろうと、セーラをこきつかうのでした。
「はい、かしこまりました。」
「どうぞ、コックさん。」
「これでよろしいでしょうか。」
セーラはだれにどんなようじをいいつけられてもはきはきと答えて、てきぱきとうごきました。
自分のへやへ帰っていいといわれたのは夜の十時でした。セーラはどきどきしながら、やねうらべやへのかいだんをのぼりました。こんどこそへやのものがみんなきえてしまっているのではないかというしんぱいがあったのです。
セーラは、そっとドアをひらきました。

「あっ……」

へやはしんじられないようなあたたかさです。テーブルの上には夕はんのしたくができています。

きのうはなかったベッキーのおさらやフォークまでがならべてありました。うすよごれていたかべがきれいにぬりかえられています。

メルキセデクの出入りするあなのまわりが家の形にぬってあって、メルキセデクの名前が小さな文字で書きこんでありました。

「まほうつかいだわ！　まほうつかいじゃなければ、こんなことはできるもんですか。」

セーラはこうふんして、かべをたたきました。ベッキーがまちかねていたようにとんできました。

「まあ！　またなんですね。おじょうさま。」

ベッキーはうっとりとへやを見まわしました。

それからというものは、セーラがへやへ帰るたびにへやがごうかになっていました。かべには絵がかざられて、本のぎっしりつまった本だながならんでいました。

てんじょうがななめになっているのをべつにしたら、セーラがむかしすんでいたりっぱなへ

やと同じくらいごうかになりました。さすがのまほうつかいも、ななめになっているてんじょうはなおせないようです。
セーラもベッキーもしごとをおえてへやに帰るのが楽しみでした。楽しみがあるということは、ふたりが元気になることです。
ふたりとも、「まほうつかい」のことはないしょにしていましたし、あれからだれもやねうらべやへきませんでしたから、だれもひみつを知らなかったのです。
セーラはアーミーとロッティーをすばらしいへやにしょうたいしようとしましたが、だめでした。
ミンチン先生がアーミーとロッティーをよく見はるようにめいれいしてあったので、こっそりとぬけ出すことはむりでした。
それからしばらくして、またまたすばらしいことがおこりました。それもミンチン先生の目の前でおきたのです。
学校のげんかんにひとりの男が大きなはこをとどけにきたのです。うけとりに出たのはセーラです。ちょうど二かいからおりてきたミンチン先生がこわい顔でめいれいしました。
「早くあて名の人のところへもっておいき。」

あて名……それは……

やねうらの右のへやの女の子さま

となっていたのです。

「これはわたしあてになっています。」

「おまえのところに?」

みよりのないはずのセーラにこづつみがきたので、ミンチン先生はへんな顔をしました。

「あけてごらん。」

ミンチン先生はきびしい声でいいました。

セーラはいわれたとおりこづつみをひらきました。

なんということでしょう。くつしたからオーバーまで、すばらしいいしょうがひとそろいはいっていたのです。

しかも、むかしセーラがきていたようなじょうとうな品ばかりです。

小さなカードがついています。

これはふだんぎです。

よそいきは、またおくります。

ミンチン先生のおどろきようといったらありません。みよりがないときめこんでいたセーラに、こんなこうきゅうなようふくをおくってくるお金もちのしんせきがいたらしいのです。
（ひょっとしたら、たいへんなことになりそうだわ……）
よくのふかいミンチン先生は、頭のなかで、どうしたらとくするか計算しているようでした。
そして、きゅうにやさしい声を出しました。
「どなたか、親切な方がいるようね。せっかくですから、さっそくきがえてらっしゃい。」
「でも……」
「きがえたら教室でべんきょうしなさい。きょうはおつかいをしなくてもいいでしょう。」
セーラはミンチン先生のかわりかたにあきれながらも、いわれたとおり、新しいようふくにきがえました。
教室じゅうがさわぎだしました。
すばらしいようふくをみごとにきこなしたセーラがはいってきたのです。
ひさしぶりに見る「王女さま」のようなセーラです。ついさっきまで、ぼろぞうきんのようなようふくをきていたというのに。
「やっぱり、ふつうの子じゃないわ。」

ジェッシーがラビニアにささやきました。

「またダイヤモンドの山でもみつかったのかしら。」

ラビニアのいやみも、セーラのじょうひんなうつくしさの前にはなんのききめもありません。

「セーラ、ここへおすわりなさい。」

ミンチン先生がゆびさしたせきは、セーラがむかしすわっていた「王女さま」のせきでした。

その夜……セーラは手紙を書きました。

すばらしいまほうつかいさま

わたしはあなたさまの正体をさぐろうとしてこの手紙を書くのではありません。

ただただ、おれいをもうしあげたいのです。わたしもベッキーもさびしくて、さむくて、おなかがすいておりました。それがいまはゆめのようなしあわせ。わたしはどうしてもおれいがもうしあげたくてペンをとりました。

本当にありがとうございました！

やねうらの女の子より

セーラは朝、その手紙をテーブルの上においで出かけました。夜、帰ってみると手紙はありませんでした。

（まほうつかいは手紙を読んでくださったんだわ……）

ミンチン先生がセーラにようじをいいつけなくなったので、セーラはへやにいる時間が多くなりました。

ベッキーのしごとも前より楽になったようです。ある夜、セーラはベッキーのために本を読んでやっていました。

あかりとりのまどのほうで、ごそっという音がしました。セーラとベッキーが見あげると黒いかげがうごいていました。

「さるだわ。おとなりの小ざるよ。」

セーラは立ちあがると、さるをへやのなかにいれようとしてまどをあけました。

「いらっしゃい。かわいいおさるくん。」

インドでそだったセーラは、さるがさむさに弱いのを知っていました。

「ひっかいたりしませんか。おじょうさま。」

ベッキーはこわそうにしています。

「人間のあかちゃんと同じよ。」
さるはすぐへやのなかへはいってきました。
「いい子、いい子。」
セーラはさるをだきよせます。
「どうなさるんですか。おじょうさま。」
「今夜はおそいからあしたかえしにいくわ。きょうはいっしょにねましょうね。」
セーラはさるを自分のベッドに入れてやりました。
さるはあかちゃんのようなねいきをたてて、すぐねむってしまいました。

15　パパのお友だち

セーラは、はじめてとなりのしゅじんの顔を見ました。小ざるをかえしにいったら、しゅじんがおれいをいいたいからというので、おうせつまに通されたのです。

ラム・ダスにささえられてやってきたしゅじんは、青白い顔をして、みるからに弱よわしそうな人でした。名前はキャリスフォードといいました。

「わざわざ、ありがとう。」

キャリスフォードはいすにすわっているのさえ、くるしそうでした。

「どういたしまして。おあずかりしている間は、あたたかくしてやりました。」

「ほう。きみはさるをかったことがあるのかね。」

「いいえ。でもインドにいるとき、おそわりました。」

「インドにいた!?」

キャリスフォードの顔色がかわりました。

「はい、ロンドンにくるまでパパといっしょにインドにおりました。」
「おとうさんと!? で、おとうさんは。」
キャリスフォードはみをのり出してたずねました。
「しにました。お友だちのためにお金をみんななくしてしまったそうです。」
「友だちのために?」
「パパはお友だちをしんようしすぎたんです。」
「友だちにだまされたとでもいうのかね。」
「よくわかりませんけど、パパはそのためにくるしんでしんだんです。」
「おとうさんの名前は……おとうさんの名前はなんというんだね。」
キャリスフォードはせきこむように聞きました。
「レーフ・クルーともうしました。」
「この子だ! わたしのさがしていたのはこの子だ!」
キャリスフォードは立ちあがってさけびました。
「おめでとうございます。だんなさま。」
かたわらにひかえていたラム・ダスがうれしそうにいいました。きょとんとしているセーラ

に、キャリスフォードはくるしそうにいいました。

「きみのおとうさんをくるしめた友だちというのはわたしなんだよ。」

セーラはいきがとまりそうでした。おとうさんがしんでしまったげんいんの人がとなりにすんでいたなんて、なんというぐうぜんでしょう。

「だんなさまにつみはございません。」

「いや、わたしがびょうきにさえならなければ……」

もう少しでダイヤモンドがほり出されようとするころ、キャリスフォードは「のうえん」にかかってしまったのです。高いねつが何日もつづいて、きぜつしてしまうおそろしいびょうきです。

やっとびょうきがなおったと思ったら、頭がぼうっとして、いままでのしごとのことがわからなくなってしまったのです。のうがだめになっていたので、みんなわすれてしまったのです。

キャリスフォードは自分がだれなのかもわからないありさまで、びょういんをにげ出してしまったのです。

のこされたセーラのおとうさんは、なにからなにまでひとりでやることになってしまいまし

た。
自分のざいさんをつぎつぎとつぎこんで、夜もねないではたらきました。

いままでふたりでやってきたことをひとりでやるのですからたいへんです。つかれのために体力がなくなったところへ、マラリアというびょうきにかかってしんでしまったのです。

それから何年かたって、キャリスフォードののうのびょうきは少しずつよくなってきました。

「わたしがレーフ・クルーをころしたようなもんだ。」

おとうさんがしんだことを知ったキャリスフォードはなげきかなしみました。おとうさんにむすめがいることを知っていたキャリスフォードは、みなし子になってしまったむすめを自分の手でそだてようとしました。

しかし、キャリスフォードはセーラの名前さえ知りませんでした。セーラの話をするとき、おとうさんはいつも「うちの小さいおくさまがねえ……」というふうによんでいたのでした。

それに子どものいないキャリスフォードは、おとうさんとあまり子どもの話をしませんでした。

セーラが通っている学校がロンドンということも、知らなかったのです。セーラがとってもフランス語がうまかったということを人に聞いて、まず、パリの学校からさがしはじめたので

す。
　モスクワにそれらしい子がいるといううわさを聞いて、ひしょにさがしにいかせたこともありました。
　なかなかみつからないのでキャリスフォードはあせっていました。そんなときにめしつかいのラム・ダスから、学校のやねうらにいるセーラのことを聞いたのです。
「ちょうどわたしがさがしている女の子と同じくらいの年の子がこまっていると聞いて、わたしは手をさしのべたくなったんだよ。」
「じゃ、まほうつかいはおじさまでしたの。」
「その子がみつからないのなら、せめて同じ年のこまっている子をすくってあげようと思ってね。」
　ラム・ダスがセーラにおじぎをしていいました。
「かってにおへやにはいってもうしわけありません。」
「あなたがはこんでくれたのね。」
「しかし、わたしがしにものぐるいでさがしていたおじょうさんが、すぐとなりにいたなんてねえ。」

「これでだんなさまのごびょうきもよくなります。」
ラム・ダスがえがおでいいました。
「セーラ。わたしをゆるしてくれるかね。」
セーラはうなずきました。
キャリスフォードは人をだますようなわるい人には見えませんでした。ちゃんとせきにんをとるりっぱな人に見えます。
「これでわたしもきみのおとうさんに、少しでもおんがえしができる。じつはきみのおとうさんのおかげでダイヤモンドの山のしごとがうまくいきそうになってきたんだよ。」
「パパのしごとが生きていたんですね！」
「うん。おとうさんはなくなられたが、しごとはりっぱに生きのこっていたんだよ。」
そのとき、おてつだいさんがげんかんにおきゃくがきたことを知らせにきました。
「おとなりの学校のミンチン先生です。」
「ほう。こちらから会いにいこうと思ってたんだが……」
やねうらべやにセーラのようすを見にきたミンチン先生は、そのゆめのようなへやにびっくりして、セーラにわけを聞こうと思ったのです。そして、となりにいることを知って、かけつ

けてきたのです。

「わたくしどもの生徒が、のこのことおしかけてしつれいいたしました。セーラ、すぐ学校へ帰りなさい。」

　セーラを見るなりミンチン先生はきつくいいわたしました。

「この子は帰りませんよ。きょうからこの子の家はここになるんですよ。」

「それはどういうことでございます！」

　ミンチン先生は目をむいてキャリスフォードにせまります。キャリスフォードはいままでのできごとをおだやかにせつめいしました。

「というわけで、セーラはダイヤモンドの山のもちぬしになったわけですな。」

　ミンチン先生はあきらめきれないようにいいました。

「でも、セーラはわたしがめんどうをみてきたんです。わたしがいなかったら、この子は町でうえじにしたかもしれませんよ。」

「おたくのやねうらでうえじにするよりましでしょう。」

「な、なんですって。」

「おくさん、あなたがセーラにたいして、どういうことをしているか、わたしが知らないとで

も思っているのかね。」
キャリスフォードがはらだたしそうにいいました。ラム・ダスがうなずきます。
「しつれいですが、わたしがみんなのぞかせていただきました。」
ミンチン先生はくちびるをわなわなふるわせながらまだあきらめません。
「この子のきょういくのことはクルーさんからまかされているんですよ。」
「いまごろ天国でくやしがっているでしょう。」
「まだセーラには教えることがあるんです。」
「小さなおてつだいさんをひっぱたいたり、べんきょうのできない子を、うすのろよばわりするように教えるのですかな。」
「し、しつれいな!」
キャリスフォードがあてにならないとわかると、ミンチン先生はセーラをなだめにかかりました。
「セーラさんはわかってくれるわね。たしかにわたしはあなたにつらくあたったこともあるけど、それもこれもみんな、あなたのためにやったのよ。」
「わたし、ちっともぞんじませんでした。」

「わたしだって、もちろんほかの先生だって、みんなセーラがすきなんですよ。さあ、いきましょう。」
セーラは、じっとミンチン先生をみつめると、きっぱりいいました。
「わたしがごいっしょに帰ろうとしないわけは、先生がよくごぞんじのはずです！」
「もう友だちに会えなくてもいいんですか。わたしがめいれいすれば、アーミーだってロッテイーだって……」
「いいかげんにしなさい！ セーラはだれにだって会うけんりがある。それより、あなたは、先生としてはずかしくないのかね。」
キャリスフォードにはっきりいわれて、ミンチン先生は気がちがったようにからだをふるわせていました。
「こんなものをひきとって、さぞくろうするでしょうよ。これでまた『王女さま』になったつもりなんだろうよ。」
ミンチン先生はにくらしそうにセーラを見ました。
「はい。わたくしはいつも『王女さま』のつもりでおりました。だからこそ、どんなつらいこともがまんできたのです。」

セーラは、どうどうとミンチン先生をみつめました。
ミンチン先生は、もうだめだといったふうに、くるりとせなかをむけました。
「どうぞ。」
ラム・ダスがすかさずドアをあけて、ミンチン先生をおくり出しました。

16　しあわせの馬車

ひさしぶりに、きりのはれたロンドンの町を一台の馬車が走ります。のっているのはキャリスフォードとセーラです。

しあわせそうに馬車にゆられているセーラを見て、だれが、ついこの間までぼろをきて、おつかいをしていた女の子だと思うでしょう。

（パパににてるわ……）

キャリスフォードのやさしい目は、おとうさんの目にそっくりでした。

あのきりのふかい日の、おとうさんの目にそっくりなのです。セーラはまるでおとうさんと馬車にのっているような気もちになりました。

「わたしもよんでいいかね。」

キャリスフォードがやさしい目をむけます。

「はい……」

セーラはうなずくと目をとじました。

「小さなおくさま。」

キャリスフォードにそうよびかけられたセーラは、うれしくてなきだしそうなのをこらえてへんじをしました。

「はい！」

ふたたびセーラに「小さなおくさま」とよばれるしあわせがおとずれてきたのです。

ロンドンはもう春でした。

さいごにほかの人たちのことを少し書きましょう。ベッキーはセーラのおつきのおてつだいさんになりました。

そして、ミンチン女学校は新しい校長先生がやってきて名前がかわりました。アーミーとロッティーはセーラの家へよくあそびにきます。

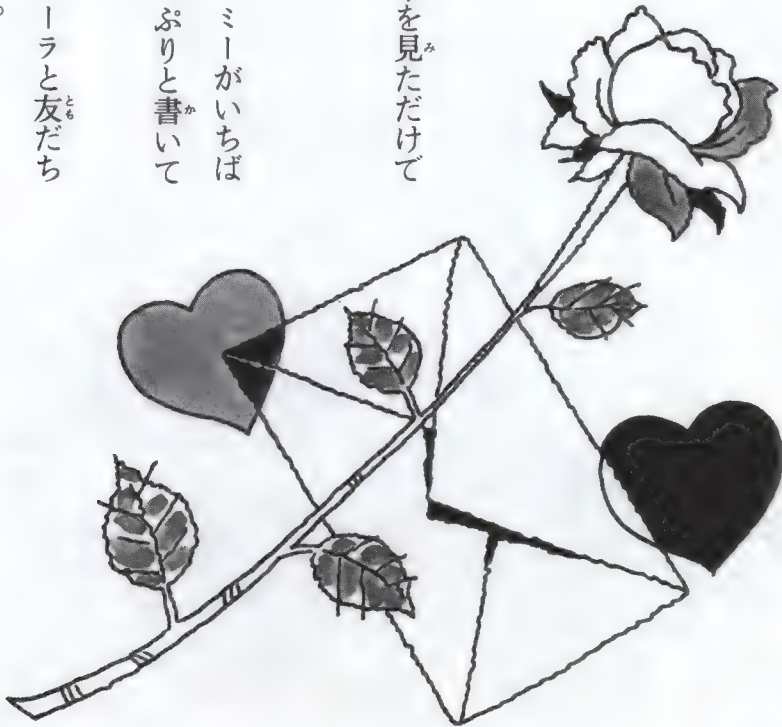
そうそう、家ぞくそろってセーラの家へひっこしてきたものがいましたっけ。ねずみのメルキセデクの一家です。しかも家ぞくはどんどんふえて、いまは十六ぴきだそうです。

では、もういちどセーラのしあわせのために大きな声でよんであげましょう。

小さなおくさま！

（小公女セーラ・おわり）

あとがき

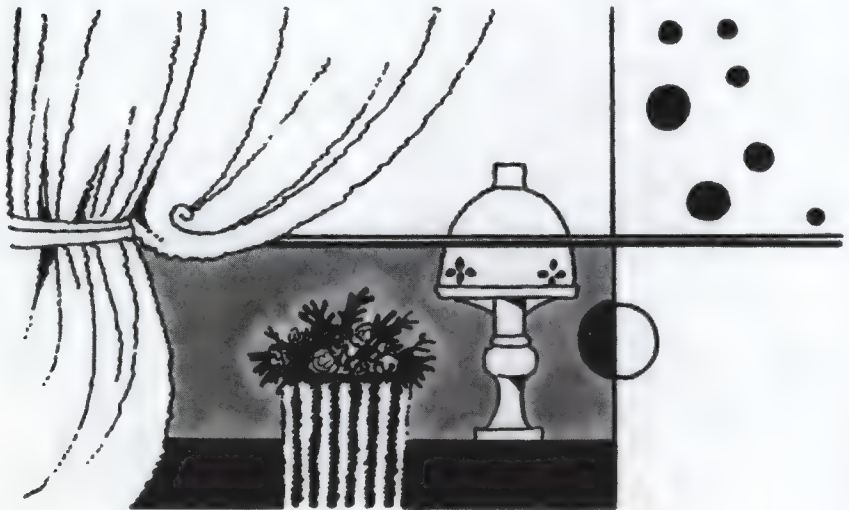
みなさんのなかにもいませんか?
このお話に出てくるアーミーみたいに本を見ただけで頭がいたくなる人が。
でも、この本はとくべつです。
なぜって、本を読むのが大きらいなアーミーがいちばんすきだった友だち、セーラのことがたっぷりと書いてあるんです。
だから、本を読むなんて考えないで、セーラと友だちになるつもりでページをめくってください。

ほうら、文字がだんだんかわいい女の子に見えてきませんか。セーラの声やロッティーのなき声が聞こえてきませんか。

バーネット夫人の「小公女」は、それほどすばらしいものがたりです。

この本では、長さのつごうでセーラを中心に書いてみました。

もし、この本でセーラがすきになってくれたら、みなさんがもう少し大きくなったとき、もとのお話を読んでみてください。

読む前はとても長くかんじられても、読んでしまうととてもみじかくかんじられることでしょう。

西浦　あかね

〈お母様がたへ〉

なに不自由なくくらしていても、どんなに苦しい目にあっても、いつも気高く純真で、他人へのおもいやりをけして忘れない少女。この物語の主人公セーラは、そんなふうな、まるで小さな王女様＝小公女(Little Princess)のような少女です。

じつは、セーラには二つ年上のお兄さんがいます。その少年の名は〝セドリック〟……といえば、思いつく方も多いことでしょう。そう、セドリック少年は『小公子』の主人公です。

『小公女』は『小公子』の姉妹編ともいえる作品で、十九世紀のおわりごろ、アメリカで完成しました。作者は、バーネット(Burnett)という女性で、一八四九年、イギリスのマンチェスターで生まれました。

バーネットの父親は、家具の卸し問屋をしていましたが、彼女が四歳のとき破産し、一家は貧困に苦しむことになってしまいました。後に、おじさんを頼ってアメリカに渡りましたが、貧しい生活からぬけだすことができませんでした。このような苦境の中でも、バーネットは、まるでセーラのように明るい希望をもちつづけていました。

バーネットは、少女のころから、自分で空想して、いろいろな話を友だちに聞かせるのが好きでした。そして、ついに、小説家になる決心を固めたのです。バーネットは熱心に机にむかい、作品を売って家計を助けようとしました。そして、十七歳のとき、わずかばかりの原稿料をもらい、作家としての第一歩をふみだしました。

やがてバーネットは、『小公子』を書きあげ、作家としての地位を固めました。『小公子』は、新しい国アメリカとながい伝統をもつ国イギリスとを舞台にし、イギリス生まれの作家ならではの作品として、広く人びとに読まれました。その後しばらくして、バーネットは、『セーラ・クルー』という題の物語を著しました。この物語は、一度、劇場で上演してから改良を加え、アーミーなどの脇役を登場させて、一八八八年、『小公女』として完成したのです。

『小公女』は、『小公子』と同じように、どんなに運命が変わっても、つねに真心をもちつづけた主人公をえがきあげ、たいへんな人気をよび、『秘密の花園』などとともに、バーネットの名を世界中に広めた作品となりました。

また、『トム・ソーヤーの冒険』(一八七六年)など、アメリカの生活を題材とした文学が流行した当時にあって、イギリスを中心にえがいた作品としても、話題をよびました。

この本は、小学校低学年むけに、『小公女』の原作を、読みやすくわかりやすく書きなおしたものです。全体的に原作より短くなっています。機会をみつけて原作を読み、セーラの心に細かにふれたいものです。

なお、使った漢字は、小学校二年生までに習うもので、すべてにふりがなをふってあります。

〈朝日ソノラマ編集部〉

世界名作ものがたり 40
小公女 セーラ

昭和60年1月30日 初版発行 検印省略
昭和60年4月20日 4版発行
原作／バーネット
文／西浦あかね

発行人／喜久村 繁
印刷／フォト印刷（株）
製本／島田製本（株）
発行所／株式会社 朝日ソノラマ
郵便番号104／東京都中央区銀座4－2－6
第2朝日ビル
振替 東京2-40311／電話 東京(563)6021～3

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-257-73040-4

朝日ソノラマ

ISBN4-257-73040-4 C8097 ¥680E

定価680円